
偽装結婚、仮面夫婦

宇治遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽装結婚、仮面夫婦

【Nコード】

N5826S

【作者名】

宇治遙

【あらすじ】

女子高生と旧財閥系企業の若社長が結婚するお話

お互いの利益のためだけに結婚し、相思相愛の夫婦を演じます

初投稿作品につき文章の稚拙さにご愛嬌

某所で連載しているものを転載しています

1st 高校生と最高経営責任者

桜が満開に咲く季節、上杉有紗は肩を越した長さの栗色の髪を上部でひつつめ、真新しい濃緑のセーラー服にそでを通し赤いリボンタイを結び、同じく濃緑でチェック柄の入っているプリーツスカートをはくと晴れ晴れとした気分です。初めて高等学校の門をくぐった。

この日から上杉有紗は秦菱大学附属高等学校一年生となった。

秦菱大学附属高等学校は学校法人秦菱大学が運営する私立高校だ。中高大と一貫教育を行っており、昨今の少子化問題から一貫教育を施すことで優秀な生徒を囲い込み社会へ輩出しているという。

「お姉様またお弁当忘れて！ こうなったら有紗が届けないといけないんだから！」

高校に入学してすぐに姉の真季は現在22歳で新入社員として企業で働き始めた。そんな真季が生活を切り詰めて生活しているにもかかわらず大事な昼食を忘れて行ってしまったのだ。有紗は顔面蒼白になりながら真季に連絡を取ったが、業務中で携帯電話には出ることにはなかった。

会社名だけ聞いていた有紗は自宅から徒歩20分、高校から徒歩15分のところにある真季の職場に大事な弁当を届けるべく、昼休みのチャイムが鳴ると同時に急いで教室を飛び出し真季の職場へと向かった。幸い敷地から出ても誰も咎めるものはいなかった。

有紗と姉の真季は異母姉妹で、有紗の母親は真季の父親であり上杉恵利子の婿養子である上杉豪と不倫の関係にあった。しかし母親が不治の病で亡くなってから有紗は豪に引き取られた。真季の母親である恵利子は今でこそ没落貴族のなれの果て、一般庶民同然だが、平安時代から明治時代まで続く公家である『上杉家宗家』の一人娘だった。有紗を引き取ることで『上杉』の名が穢れると思ったのか、

夫の不倫相手の子を引き取り『上杉』の子として育てることになどく嫌悪感を覚え、有紗と叩きだそうとあの手この手を尽くしたがその度に豪が間に入り諫めることも多かった。そんな夫である豪に三行半を突きつけるとある日突然出て行ってしまったのだ。

突然三行半を突き付けられた豪はその後精神を病んで精神病院送りとなったのである。

そんな上杉家でひどい扱いを受けたにもかかわらず有紗は真っ直ぐに優しい子に育った。

「ここがお姉様の職場ね」

この高層ビルが真季の職場だという。見上げればとても高い建物で首が痛くなりそうだった。

ビルのエントランスホールは吹き抜け構造となっておりとても広く、エレベーターまでの距離がひどく遠く感じられた。エントランスからは20メートルはありそうだった。

有紗は今しがた開いたばかりのエレベーターに向かって全力疾走した。まるでこれを逃すと次はないのだと強迫観念に駆られるように走った。

「待って下さい！ 乗ります！」

「何階かな？」

「えっと……」

どこの階までかは聞いていなかった。きよろきよろして気まずそうに声をかけた人物を見上げると、その人は複数の人物に脇に張り付かれ、まるでVIP待遇の人物のようだった。

そしてよく見てみるに、オーダーメイドのスーツであることはすぐに分かった。スーツがぴったりと合わせてあるかのように、180センチを優に超えるその人の体の一部となっていたのだ。一応上

杉家末端構成員の端くれである有紗にもそれはすぐに分かった。

「分からないのかい？」

「ごめんなさい。お姉様にお弁当を届けに来たんです」

そう言っている間にエレベーターの扉は閉まり、速いスピードで上昇していった。もちろん有紗は何階に姉がいるか分からないので当然希望階のボタンは押さずに流れに任せていた。

エレベーターに乗っているときにVIP待遇の有紗に言わせればイケメンはしばし考える仕草をしたのち、有紗に二、三問うた。

「君、名前は？」

「上杉有紗です」

「今日はどういった用件で？」

「姉の上杉真……」

「社長、次の折衝は14時からです」

有紗の言葉を遮ったのはおそらく秘書だろう、手には分厚くなつて使い込まれて付箋が貼り付けられた手帳が広げられていた。そして有紗に声をかけた人は社長だという。言われてみれば確かに頂点に立つべき人物にあるべき風貌が具わっていた。

「ああ、分かっている。15階に着いたら君たちは少し席をはずしてくれ」

「はい、承知いたしました」

社長の命令は絶対なのだ。そして秘書や周りを囲うスタッフは従わなければならない。

15階に到着したのち、社長と呼ばれた人は有紗についてくるよう促すと『社長兼最高経営責任者室』と印字された20センチ四方

の金色のプレートが掲げられた一室へ入って行った。

「名乗るのが遅れて申し訳ない。私はこういう者だ」

差し出された名刺には『秦部グループ最高経営責任者 秦部有稔 はたへゆじん』
Yu-jin Hatabe』と記されていた。

有紗は手渡された名刺を穴が開くくらいまじまじと見つめ、秦部有稔と視線を何度も往復していた。秦部有稔の容姿はおよそ日本人とはかけ離れていた。というのも、身長は優に180センチを超え、髪は少し薄い茶色と瞳の色素が少し薄い茶色と青色が混じったような複雑な色でおそらくハーフかクォーターだろうが、射殺いころするような鋭い眼光を宿していた。

一度見たら忘れることなどできないだろうというくらい印象が強すぎた。

「普段はここには誰も入れないのだがね。君が困っていたようなので私で力になれるならと入ってもらったわけだ」

さて社長がここまでするのは甚だ疑問だが。そう言っている間にも秦部有稔は「上杉、上杉」と呟きながら分厚い社員名簿をめくっていた。

秦部グループといえば財閥解体前には、日本で知っている財閥は、と問われたら必ず一番に秦部財閥と返されるくらい有名で日本で最大規模を誇る財閥だった。それが1945年から52年にかけて行われた財閥解体のその後はグループがばらばらになってしまわないように、秦部家の当主にはカリスマ性と求心力、指導力が求められている最中だ。これまで当主がグループの最高経営責任者だったり総帥となるのが常だったが、現当主は高齢のため兼任ができないという。したがってグループ最高経営責任者として有稔が推されたのだ。有稔の他にも次期当主候補はいるが、いかんせんこの手の人間にな

るべき素質が具わっていないらしい。

「姉の上杉真季にこれを届けたくて」

腕時計を見るともう13時を回っており昼休みの時間が終わってしまった。結局有紗は昼食にありつけず仕舞いで、入学一週間で授業を欠席することになるとは、今にも泣きだしそうだった。

ただただ有稔のデスクの前にお弁当を胸に抱え立って涙をこらえていた。

「上杉真季くんは20階の情報処理部で研修を受けているだろう。それを届けるのだろうか？ 私が案内しよう」

有稔に連れられて20階に着いたときに真季は連絡を受けて待っていたらしく、有紗を見るなり駆け寄ってきた。

「有紗！」

「お姉様、ごめんなさい、遅れて……」

「フン、そんなのもうお昼食べちゃったわよ。遅いのよ。お昼はとってもおいしかったわよ」

早い話がそれは有紗が作った弁当があまりにも粗末で人前で食べられないということだった。

真季は父親である豪と有紗の母親との不倫の一件で、有紗が上杉家に厄介になると決まった時から有紗には軽蔑のまなざしと、もはや妹としてではなく家政婦同然の扱いをしてきていた。

「……昨日のお弁当もお姉様のお口に合わなかったんですね、ごめんなさい」

「もうそんなの作らなくていいの！」

そう言い放つと受け取っていた弁当箱をゴミ箱に投げ捨てたのだ。これにはさすがの有紗も泣かずにはいられなかった。少しでも真季と距離を縮めたくてなんでもしてきた有紗は、それすらも否定され、真季とはもう分かりあえることはないのだと愕然と肩を落とすしかなかった。

その様子を有稔は有紗と真季の死角になる壁にもたれしっかり聞いていた。そしてグツと拳を握りしめた。

1st 高校生と最高経営責任者（後書き）

こんな出会い方とかないわーとかのツッコミはなしです笑

2nd 姉との決別を誓う

姉の上杉真季（うすぎまこと）に、有紗（あさひ）が今まで歩み寄ろうと努力してきたことがすべて否定されてしまった。そのことは有紗の心に非常に大きな傷となつて残つてしまった。

「お姉様……」

「もういいの、ここには来ないで。顔も見たくない！」

「そんな！」

「あ、それと高校の学費ももう払ってあげないから。奨学金もらうなり好きにしなさいよ」

そう吐き捨てるると自分の部署に戻つて行つてしまった。歩み寄るための話し合いの場すら設けることができなかつたのだ。有紗は真季が自分のことをよく思っていないことは厄介になり始めたころから分かつていた。でもいつか本当の姉妹のように仲良くなれる日が来ると信じてやまなかつたからこうして有紗から行動を起こしてきたのだ。

家では真季は有紗を虐げるような行動をたびたび取つてきた。それは真季の母親恵利子を出て行かせたのが有紗で、家族三人の生活を崩壊させたのも有紗だと思つていたからである。それだけではない、恵利子が公家の娘だつたからか、真季にもそんな『上杉家宗家』が誇らしかつたのだ。要は『お嬢様気質』で裕福な生活がそうでなくなるこがいやなだけだつた。

有紗が来るまでの生活は裕福そのもので有紗が来てからは生活が180度変わつてしまった。だからその辛さを有紗に当たりつけることによつて自分を保つてきた。

有紗はゴミ箱に捨てられた弁当箱を拾い上げると、その場で泣き崩れた。

「君、そこで泣くんじゃない」

そこは情報処理部の入口の真前でさすがにここで泣かれては業務に差し支えると思つたのか、死角になる壁にもたれて事の成り行きを見守つていた秦部有稔はたへゆつじんは有紗の腕をとり、同階にある休憩室へ連れ込んだ。椅子に有紗を座らせると、有稔はテーブルを挟んで有紗の向かいに腰掛けた。

「お姉様が……うつ」

「もう泣くんじゃない」

「ごめ、なさい」

いつまでたつても有稔の腕を掴んだまま離そうとしない有紗を見て、有稔は腕時計を見てそろそろ例の折衝の時間が迫っていることに気づく。また話を聞いてやるからとそのままのつもりで休憩室に備え付けられている紙コースターにメモを書き渡す。

「失礼、もうそろそろ時間なんだ。これに電話してくれればいつでも話を聞いてやる」

それは有稔のプライベートの携帯電話番号で誰にも教えたことのない電話番号だった。普段は社用の携帯電話番号を教えることが多く公私をきっちり分けている有稔であるが、なぜか有紗にはプライベートの番号を教えたのだ。

「ごめんなさい、ご迷惑でしたね」

有紗は涙が伝った頬を手の甲で拭いながら笑う。有稔はそんな有紗を見て、これまで出会ったどんな女性より有紗が一番きれいで素

直だと思った。自分の境遇と重なる部分もあり、手放したくない自分のものにしたいとそんな邪悪な考えが頭をよぎって、有紗から視線を離しその考えを一掃すべく小さく頭を振った。

「君は秦菱大附属高校アキライの生徒かな？ 秦菱は私もよく知っている。また会うかもしれない。では失礼する、気をつけて帰るんだよ」

有稔は有紗の頭にぼんと手を置くとそのまま15階の最高経営責任者室へ向かっていった。

有稔がエレベーターに向かっていったのを見送ると、有紗は渡されたメモを見ていた。走り書きされたその数字は英語圏の人間が書くような数字だった。どうして自分の話を聞いてやるなど言い出したのか、メモを見てもその答えは返ってこなかった。有紗の有稔に対する印象は決して悪いものではなかった。

秦菱大附属高校を有稔が知っているのかは有紗の制服を見れば一目瞭然だった。『若葉市』の学区では濃緑のセーラー服など秦菱くらしいもので、他の高校は濃紺色のブレザーかセーラー服がほとんどだった。だから秦菱の生徒だと分かったのだと有紗は思っていた。しかし実際のところは、秦部グループより前の秦部財閥の初代総帥が学校の少なかった時代に子供たちに教育の機会を、そして世界に羽ばたいてほしいという理念の下、秦菱大学は設立された。そして中高大一貫教育を確立し、今に至る。有稔にとっては秦菱はとても身近な存在だったのだ。

有紗は『また会うかもしれない』という一言がずっと気になっていた。そしていつまでもここにいられないと思い、建物を出て秦菱大学附属高等学校へ徒歩で帰って行った。置きっぱなしになっていた荷物を持って帰るため、そして姉の近くから少しでも離れるため。

「有紗、心配したんだからね」

そう口々に友人たちは言い、有紗を心配する。入学一週間できいた友人はもう仲のいい親友と言ってもいいくらい親しくなった。それは一重に有紗の親しみやすい人柄が手伝ったこと。このときばかりは今は亡き母親に感謝した。

「ごめんね、ちょっと用事があつて帰ってたの」

こんなに心配してくれる親友に嘘をつくことは申し訳なかった。だから有紗はスカートのポケットに手を入れ、例のメモを握ってさつきあつたことをないものにしようとした。

学校から帰れば家には誰もいなくてとても暗い。そして姉との決別を決めるべく、荷物をまとめ出て行く準備を始めた。ついこの間中学校を卒業したばかりのひよこのような高校生がこれから再出発するための新天地などどこかも決めず、どうにかなるだろうと楽天的な気持ちで臨もうとしていた。そんな無謀なことできるはずもないのに自分には何でもできるのだと有紗は思っていた。

お姉様、長い間お世話になりました。私のことはもう忘れてください。さようなら。有紗

そう括られたメモを食卓のテーブルに置き、有紗は上杉家を後にした。そのことはなぜか何でも聞いてやると言った有紗に伝えたくなった。有紗は携帯電話を取り出し、くしゃくしゃになった携帯電話の番号が書かれたメモを見ながらダイヤルを押していった。でた

らめだろつと思っていた番号に5コール目で本当に有稔が出るとは思っていなかったので驚きのあまりしどろもどろになった。

『秦部ですが、』

「あの……」

低いバリトンの声を聞いて有紗の胸は高鳴り、次の言葉が出てこなかった。

『ああ、君か。上杉有紗くん』

会って話したのはたった一瞬だったのに声を聞いただけで名前まで出てくる。それが嬉しいと素直に喜んだ。

「あ、はい。上杉有紗です」

『どうしたんだい？』

「姉とのやりとり見られてたでしょう？ その姉と決別することにしたんです。これ以上私のせいで姉を苦しめちゃいけないと思って出て行くことにしたんです」

有紗は自嘲的な笑みを浮かべ有稔の次の言葉を待っていた。「これからどうするつもりなんだ」とか「15のガキが何を考えているんだ」とか言われると思つて構えて待つていたが、有稔はそんなこととは言わなかった。そのかわり耳を疑うような衝撃的な発言をしたのだ。

2nd 姉との決別を誓う(後書き)

なんかもうggdggdの予感……orz

3rd 生きていくための条件

『暮らすところに困っているのかい？ だったら私と住めばいい。きつと利害は一致する』

「え……？」

何を言っているのだと、秦部有稔はたへゆうじんの頭は正常な判断ができないくらい沸いてしまったのではないかと聞き返さずにはいられなかった。しかも一回会ったくらいの人間と同居など正常な人が考えることではない。しかし有稔は上杉有紗つえすきありさに考える猶予を与えず矢継ぎ早に次の指示を出す、というか畳み掛ける。

『しかしそれには条件がある。君が今いる所を言ってくればそこまで行くが』

有稔は正気の沙汰ではないと有紗は卒倒しそうになった。しかし無一文の有紗にしてみれば今日一日の寝床があればそれはどこでもよかった。そして有稔の提案に傾きそうになる自分を律していた。

「いえ、でも私たち赤の他人ですし、お互いのことよく知りませんし……」

『少なくとも君のことは知っている、だから初対面でも真っ赤な他人でもない。そうだろうか？』

この男、秦部有稔には付け入る隙がない。屁理屈のようなことでも平気で返してくる有紗に有紗は困り果てた。そして有紗には勝ち目がないと悟った。なんとしても同居させる気だということだ。

「今日の寝床を探そうと思って繁華街へ来てます……いやっ」

シヨルダーバッグを肩から提げて繁華街を歩いていた有紗は、ここが若葉市の中でもとりわけ治安が悪いことを分かっていたはずだった。しかし目先の『今日の寝床』を探すことしか見えておらず、周りへの警戒心を置き去りにしていた。よく注意しなければならなかったのだ。

二人組の男は有紗の前と後ろに付いて行く手を阻んだ。そして腕を掴み「いいことしようぜ、お嬢ちゃん」などと汚い言葉を吐き、いかげわしい建物へ連れて行こうとするが、恐怖心が勝りどうすることもできなかつた。そして初めて『男』という生き物がとても怖い生き物だと思い知った。

「なあ？ わざとそんな格好で来たんならどういう意味か分かるだろう？」

制服のまま出てきてしまったのが悪かったのか、はたまた秦菱大附属高校の生徒だから目を付けられたのか、そんなこと考える余裕すらなかつた。

「いや、放してください」

有紗には有紗の身に何が起こっているかすぐに分かつた。幸い有紗が電話を切らないでくれたおかげで状況を判断でき、すぐに向かわねばならないことを示唆していた。

もうすぐでいかがわしい、いわゆるラブホテルに入るのか、というときに有紗の視界が急に暗くなって後ろから聞きなれた声が出た。その声に安心感を覚え、とっさに名前を呼んでいた。

「その汚い手を離してもらおうか、彼女は私の恋人なんでね。指一本でも触れると容赦はしないが」

「秦部、さん！」

秦部有稔は黒いGT-Rの右ドアから颯爽と降りると、二人組の男を殺さんばかりに後ろから腕で首を絞めあげていた。その瞳は昼間のそれとは違ってとても同一人物とは思えないくらい怒りに燃えていた。有紗は解放されたのち、その瞳を見て震えあがった。勝手なことをするところなるのだといやでも思い知らされた。

二人組が二人の前から散っていった後、いつまでたっても小刻みに震えたままの有紗を見て有稔は胸に抱き寄せた。

「よく名前覚えていたね。遅れて申し訳なかった」

「いえ……来て下さって、助かりました。ありがとうございます」

「ここは君の来るところではない」

「ごめんなさい」

「分かればいいんだ。さあ乗って」

有稔は繁華街のネオンを映し込み反射させるくらい磨きあげられた黒いGT-Rの左ドアを開けてナビシートに乗るように促し、有紗はそれに素直に応じるが思うように歩を進められない。有稔の怒りに燃えた瞳が嘘のように今は穏やかな澄んだ瞳を宿している。それを見て有紗は安心した。

有稔はドライバーズシートに乗り込むとアクセルを踏み、夜の繁華街を走り抜けた。

「さて、また君と会ってしまったわけだが」

「……はい」

また何か言われて怒られると思った有紗はシヨルダーバッグをぎゅっと抱え、身構えて次の言葉を待つ。

「家を出てどうするつもりだった、まだ君は15か16歳だろう？
一人で生きていくことなど出来ない」

有稔の言うことはもつともだ。15の子供が誰の力も借りずに生きていくことなど不可能だ。しかも未成年というハンデ付き。15といえど『保護者』がいないと生きていけないただの子供なのだ。

「お姉様を私から解放してあげたかった。辛そうだったから。ただそれだけです」

「姉君は君の存在を疎ましく思っていただけじゃないのかい？ 君はそのような考え方をするからどうやら姉君とは正反対の人間のようだ」

有稔は微かに口角を上げわずかに笑みを浮かべた。

「間もなくブリリアント・リバーに到着する」

「ブ、ブリリ……？」

「ああ、私の住んでいるマンションの名前だ。ブリリアント・リバー、輝く川という意味だ」

「輝く川。天の川みたいですね」

有稔は目を見開き、面白そうに笑みを浮かべた。

「天の川……君は面白いことを言うね。ブリリアント・リバーにそんな意味があったとはね。さあ到着だ」

マンションの駐車場にGT-Rを滑り込ませると、有稔はエンジンを切って車から降り、左ドアを開け有紗に降りるように手を差し出した。

「お嬢さん、お手を」

差し出す手は有紗のそれより大きく骨張っており力強さを感じさせる。有紗は手を差し出せば、力強くもあり優しくもある独特の手の繋ぎ方をするのだと胸が跳ねた。

この男に愛される女性はどんな人なのだろうか。

地上30階建ての高層分譲マンション、『ブリリアント・リバー』は市内の一等地の小高い丘に建てられている。ほんの数カ月前に竣工したばかりの真新しい新築マンションだ。25階から30階にかけてはプレミアムフロアといって、とりわけ眺望に恵まれ約20帖のリビング・ダイニングからは市内を一望できる一面ガラス張り仕様となっている。

秦部有稔の住む最上階である30階の3LDKに到着し、玄関を入ってリビング・ダイニングに通されると有紗はあまりの絶景にガラスに張り付き言葉を失うのだ。

「き、きれい……」

「気に入ったかい？」

いくら公家の上杉宗家令嬢といえど、名ばかり令嬢の有紗には見たことのない高さから市内を一望出来る場所に自分がいることなど生まれて初めてのことなのだ。

「シャワー浴びておいで。リビング出て左の突き当たりだ。話はそれからだ」

有紗がバスルームに消えてから有稔はネクタイを緩め、ソファに身を預け物思いに耽っていた。これから実行する計画には有紗が不可欠なのだ。それをいかにして納得させ、さらに自分の元から逃げないように縛り付けておくか考えられる方法は一つだった。

一歩間違えれば後ろ手に回され犯罪者の烙印を押され一生後ろ指

を指されるだろう。次の日には『秦部グループCEO秦部有稔容疑者、逮捕!』などと新聞を始めメディア媒体はこぞつてこれに飛び付き書き立てることだろう。そうなれば有紗にも被害が及ぶことは間違いない。だからこそ慎重かつ大胆に行動しなければならぬのだ。

「ジャグジーなんて初めてでした。お話って何ですか?」

風呂上がりの有紗は生乾きの髪をタオルで拭きながら有稔の元までやってくる。有紗はジャグジーが新鮮だったのかとてもご機嫌だった。そんな有紗を見て有稔はふっと口元を緩めた。

今から有稔が有紗に話すことはとても残酷なもので一瞬で有紗から輝くような笑顔を奪うものだった。

3rd 生きていくための条件（後書き）

わたくし、スポーツカーが好きなので有稔さんをGT-Rに乗せたかったんですよ。もちろん有稔自身も車好きという設定で。ですから運転席助手席と表記せずにあえてドライバーズシートとかナビシート、リアシートとかそういう表記としています。そういうのウザいわーと思われる方がいらっしやったらどうしようー一抹の不安がよぎります。なんかそういう表現にするとスポーツカーぽいですよね笑

4 t h 高校生の幼妻

秦部有稔はたべゆうじんはかすかに口角を上げ、口を開く。有紗はその間有稔を凝視していた。

「君は今日から私の妻だ。君に拒否権はない」

「妻って、冗談」

「冗談を言うと思うか。時間の無駄だ」

有稔はそう吐き捨てた。

有紗はわが耳を疑った。これは空耳ではないのかと、そして同時にこれが有稔の言うところの『利害が一致する計画』なのだと即座に理解した。しかし有紗にはこれに同意したからと言って特段の利益を得るわけでもなければ害を被るわけでもない。

有稔は眼鏡のブリッジを中指で押し上げ、話し始めたのは至って真面目な話だが、有紗にはそれが冗談にしか聞こえないのだ。それほど現実とはかけ離れており、実感などわいてくるはずもない。

「あの……利害が一致するとおっしゃいましたね。私には特に利害とかそういうものはないと思うんですね。だから正直あなたに妻になったからといってメリットがあるわけではないと思います」

「メリットはあるじゃないか。住むところに困らない上、君の姉君を見返せる。過去にどんなことがあったのか知らないが姉君は十分酷いことを君にしたと思うぞ」

「お姉様を見返せる……？」

有紗はたしかに姉、真季からぞんざいな扱いを受けてきた。しかしそれは有紗の母親の貞操観念が低いのが原因ですべては狂ってしまったのだ。だから有紗は真季に対してはじっと耐えるのは当然の

ことだと思っていた。しかし有稔が言った『見返せる』という言葉に少しくらい困らせても大丈夫だろうと魔が差したのだ。

有稔は眉間にしわを寄せ、有紗の出方をうかがっていた。

「見返すことは十分可能だ。だが条件があると言った。あくまで偽装結婚なのだから、客観的な夫婦の体裁が調っていればいいがすぐに見抜く人間もいることだろう。したがってしっかりと妻を演じること。グループ内でパーティーがあったら妻は病弱で出席できないということにしておこう。まあ出たいというなら好きにするといい分かるな？」

有稔は有紗のあごを掴み自分の方へぐっと近づける。有紗はいきなりのことでびっくりしてバランスを崩し、有稔の座るソファに片膝をついた。

「偽装結婚……?」

有紗はそのよくない響きに犯罪に加担しているのではないかと、背中に汗が伝っていくのがリアルに感じられた。有稔の指は有紗の背中をツーツと伝い下りる、その仕草に身震いするほどゾクツとした。

「なかなか好条件だと思うが。それと一応妻として拘束してしまうのだから月10万支給しよう。好きに使うといい。君がこの条件を断ることもできるが、そのときは君と姉君の将来はないものと思え、返事は」

「あ……」

初めから条件などあってないようなものだったのだ。真季の名前を出されたらさすがの有紗も断ることなどできない。したがって二

つ返事で偽装結婚に応じるほかないのだ。家の中で夫婦を演じなくてもいいことは不幸中の幸いかもしれない。外ではしつかりと夫婦を演じ有稔を支える妻に成り切らなければならぬ。だが、そこには決して愛などというものは存在しない。これは一種のビジネスなのだ。

「君は今いくつだ」

「……15。明日16歳になります」

「では明日、婚姻届を出す。分かったらもう寝る。お子様はもう寝る時間だ」

「……はい」

有稔に振り回されっぱなしの有紗は疲れ果て、一応夫婦なのだから一緒にベッドに寝るべきだと言われおとなしくそれに従う。この広いベッドは有紗には辛すぎた。これが夢ならどれほど嬉しいだろうとそう思いながら目を閉じた。

一方、有稔は有紗に言ってしまったことが果たして正しいことだったのか、たしかに迷いもあったが今は既成事実を作っておかなければいけないとその迷いを払拭する。眼鏡を外すとシャワーを浴び、ミネラルウォーターを勢いに任せて一本飲み終えると有紗の寝ている寝室へ入って行った。そこはすでにいつものように真っ暗な空間となっていた。しかしいつもと違うのは自分以外の人間の息遣いを感じる。ダブルベッドに腰掛けると有紗の頭を撫で自分と同じ香りのする少し長めの髪にキスを落とす一言呟く。

「君を巻き込んでしまって申し訳ない」

有紗が目を覚ますと有稔は隣で、しかも有紗の腰に手を回し寝ていた。それに気づき手を引っぺがすと慌ててベッドから滑り下りた。そして今日が休日であることに感謝した。頭を冷やすにはちょうどいい。

「やだ！ なにしてるんですか！」

大声でそう言っても一向に起きる気配のない有稔。そう、有稔の寝起きはとても悪い。多少の大声では全く動じないのだ。そして目を覚ましたかと思えば毒づく。

「やかましい……おとなしいせえや」

「ちよつ、昨日とは口調が……」

秦部有稔は高校卒業までの数年間を関西で過ごした。しかし次期当主候補としての白羽の矢が立ってからはグループの拠点がある関東の大学に進学することになったのだ。そこで標準語をみっちりと教育された。だから普段の生活では関西弁など出るはずもない、むしろ初めから標準語を話す人間のように何の違和感もなく話してみせるのだ。要は完璧主義所以なのだ。

有稔はいきなりむくつとベッドから起き上がりベッドサイドに立っている有紗に見向きもしないで寝室を出、リビングへ行ってしまった。目覚めはすこぶる悪いようだ。

「あ、ちよつと！」

「なんだ、上杉君。あ、今日から秦部有紗くんだったね」

その一言で現実味を帯びてくる偽装結婚。

「実は今日、社のパーティーがある。もちろん君は参加しないで、今は結婚しているという事実が重要なんでね」

「パーティー？ 『妻』として何かできることはありませんか？」

有紗には聞きなれない単語に少々顔をしかめた。これまでは住む世界が違ってきたので聞きなれない単語が多すぎる。

そう、こうなればもう『妻』になりきってしまった方がいいのだ。これを演じ切れたら有紗は主演女優賞受賞も確実だろう。

「うちにいて待っていてくれたらそれでいい、分かったね有紗」

有紗と低いバリトンの心地よい声で言われ思わず目を見開く。『

君』としか言わない有紗が有紗と言ったことが新鮮だった。

「わかりました。待っています」

「いい子だ」

その夜、有稔は秦部グループ100パーセント資本の完全子会社が経営する『Hatabe green hotel』に来ていた。もちろんパーティーへの参加のため、しかしそれは建前で実際は有稔の婚約者をお披露目する機会でもあった。そこにはマスコミも呼び、大々的に催す予定だという。

「あなたが本邸に近寄らないから婚約者の神戸純玲さんかんべすみれと心配して

いましたのよ、有稔さん」

そう言うのは有稔の祖母であり現当主の妻でもある秦部聡子、はたへそうじ 75。その隣に控えめに立っているのが今回有稔の婚約者として披露目される神戸純玲23歳。神戸純玲は聡子の妹の孫娘だ。この婚約にあたり、聡子が以前から有稔の許嫁に純玲を推してきたのだ。その執念や半端ない。それは一族以外の血を入れないため、そして一族の強化を図るため。いわゆる政略結婚というやつだ。

「初めてお会いしますね、神戸純玲です。よろしくお願いします、有稔さん」

純玲はお辞儀をし有稔にニコツと笑顔を向ける。今日の純玲は淡いピンク色のパーティードレスを着ている。しかしそれは彼女を引き立てるといふことはなくむしろ反比例してまるで取って付けたような違和感があった。はつきり言ってしまうえば無理やり清楚を装っているような違和感である。

「おばあ様……お久しぶりです。このお嬢さんとの婚約だなんて初めて聞きましたよ」

もう婚姻届を役所に提出し、正式に『結婚』した有稔には今更婚約など物理的に不可能だ。有稔はこうなる前に先手を打ったのだ。今回の有紗との結婚にはそんな思惑もあった。

「有稔さん、あなたが本邸に近寄らないからでしょう？ 私は以前からそう申してきましたよ。純玲さん以外、よその血を入れ一族の血を汚すような下衆な真似はしないでくださいね。ただでさえあなたはよその人間なんですから」

「おばあ様、それは言わない約束ですわよ」

「あら、ごめんなさいね」

聡子と純玲はお互いの顔を見合わせるとクスクスと笑い始めたのだ。これが余計に有稔の癢に障る。

「ああ、そうでしたか。大変失礼。婚約など好きになさればいい。ただ、今の私には物理的に婚約や結婚など不可能ということだけお伝えしておきますよ」

今の秦部グループにはあまりに無能な次期当主候補しかおらず、統率力を持っている有稔がグループの長を辞めるとなればグループは一気に崩壊してしまうくらい脆弱だ。だから聡子は強硬手段に出られないからこうしてチクチク小言を言うことしかできないのだ。

「どういう意味です？」

聡子の顔色が一気に変わり、怒りを含んだものになる。同じく純玲も聡子の腕に手を回し様子を窺っているようだ。有稔は今こそ攻める場面であると感じたのか口角を上げ笑みを含んだ顔を二人に向ける。

「そのままの意味ですよ。もう妻のポジションには先客がいるのですよ」

有稔と聡子、そして純玲のただならぬ雰囲気を感じたのか、場の空気は一気に静まり返り、マスコミは彼らにカメラを向けストロボを焚きシャッターボタンを連打する。

「どうということなのか説明なさい！」

「結婚したということですよ。なんでも彼女は体が弱いので今日こ

の場には連れてきませんでした」

「まあ！ 私の許しもなく勝手に勝手な真似を！ 親も親なら子も子ですか！ 聞いて呆れます！」

「おばあ様……」

「安心なさい、純玲さん。まだ勝機はあります」

聡子と聡子にすぎた純玲は有稔にとつて今はとても滑稽に映る。

もう笑いが込み上げて、今にも大声をあげて笑いたいのを堪えるので必死だ。

そして翌日にはマスコミの紙面を賑わせた。『秦部グループCEO 極秘婚！ 現当主夫人の反対を押し切り結婚するほどの女性とは……？』誌面の煽り文を見て有稔は声をあげて腹を抱えながら笑うのだ。これほど滑稽なことは後にも先にもきつとないだろう。

4 t h 高校生の幼妻（後書き）

なんだか現当主夫人とバトツてしまいそうな雰囲気です。ようやく婚約者の純玲嬢登場です。夫人は有稔のことをよく思っていない様子ですね。しかしこんな態度を取る夫人にも思つところがあるわけ……。

5th からっばの結婚生活の始まり

有稔は週刊誌をリビングのテーブルに放り投げると、有稔はソファに腰を下ろし、有紗は有稔の隣に浅く腰掛けた。どんな行動をとってもやはりよそよそしいのは否めない。仮にも夫婦なのだから『秦部さん』と呼ぶのはおかしいだろうというので有紗は『有稔さん』と、そして有稔は『有紗』と呼ぶことにした。

「有稔さん、大丈夫なんですか？」

「ああ、言っちゃった。もう結婚しました、とね。明日、社ではその話題で持ちきりになるだろう」

パーティーが終わり帰宅した有稔はしてやったり顔で眼鏡を外しテーブルに置いた。ひとしきり笑いいよいよ笑いが止まらなくなつたときに有紗に心配され何があつたのか話した。しかし有紗に釘を刺しておくことは忘れない。

「有紗、君はこれから上杉のまま高校に通うといい。そのほうが君もやりやすいだろう」

「分かりました、そうします。怪しまれずにすみませぬ」
「物分かりがいい。そういうことだ」

これで本邸からの結婚催促へ多少時間稼ぎになるだろう。戸籍を閲覧してしまえばすぐに分かってしまうことだが、上杉有紗が妻だといつても有紗が表に出なければどんな人間かなど分かるはずもない。高校へは有稔が規制と圧力をかければ外部に情報が漏れることもない。これは有稔にとって非常に有利な点だ。

「ひとつ聞きたいことがあります。有稔さんって関西の出身なんで

すか？」

それは有紗が先日から気になっていたことだ。

有紗は少し眉間にシワを寄せ、話すのに抵抗を示す素振りを見せたので、有紗は地雷を踏んだと思ったのか「ごめんなさい」と謝った。

「君が謝ることはない。ただ自分のルーツを話すことが苦手なだけだ」

しかしお互いのルーツを知り合うことはこれから夫婦生活を円滑に行っていく上で必要なことだと割り切ったのか重い口を開き、ぽつぽつと話し始めた。

「またいずれ本邸に君を連れていくことになるだろう。そうなる前に話しておく。俺は……ロシアで生まれ育った。15歳までロシアで過ごし、18歳までは京都で過ごした。ある意味では関西出身だろう」

「ロシアの生まれ？ だから少し色素が薄くて日本人ばくないんですね」

有紗は有紗の外見からおおよその予想はつけていたが、実際本人の口から聞くのとはまったく実感の度合いが違う。

有紗は話し続ける。有紗の父親はロシア人でロシア大使館の職員、母親は秦部家現当主の三女だった。ロシア人の父親が仕事の都合でロシアに帰国するというので、母親は祖父母や一族の反対を押し切り駆け落ち同然でロシアに渡った。そのときにはもう有紗を妊娠していた。それきり秦部とは疎遠になった。いずれ生まれる子供は色の薄い、いわゆる外人さんだ。封建的な秦部家にとってそんなこの馬の骨とも分らない男の子供を受け入れるなど到底できなかつ

たのだらう。だから勝手な真似をした恥さらしの三女がロシアに渡つてくれたお陰で自ら手を汚すことなく排除することができた。事實上、絶縁状態となった。

こうして7月、ロシアでユージン・ニコラエヴィチ・アルスキーが誕生した。

「と、いうことは有稔さんにはちゃんとした名前があつたんですか？」

有紗は熱心に話を聞き、一字一句聞き逃すまいと真剣だ。そうやって真剣に自身のルーツを聞いてもらえることは有稔にとって滅多にないことだ。

「18歳までユージン・ニコラエヴィチ・アルスキーを名乗っていた。父親は母親と結婚したが、他に女を作つて離婚した。15歳で日本へ来て18歳まで京都で過ごした。あれだけ反対を押し切り駆け落ちしておきながら出戻りなど恥ずかしくて秦部家に戻れなかったのね。母親はまさか日本に帰ることになるとは思っていなかったらしく、ロシアではずっとロシア語で会話していた。だから俺はロシア語しか話せずに日本語に一番苦労した。今の私の日本語はネイティブに近づけているかな？」

「とても流暢な日本語ですよ。日本生まれのハーフかクウォーターかと思いました。ユージン・ニコラエヴィチ・アルスキー……」

聞いたことのない名前を噛み締めるように口にした有紗は、今の有稔の名前である秦部有稔とユージンを脳内で交互に繰り返していた。有紗はロシアで過ごしていた頃の有稔はどんなだったのか、どんな暮らしをしてどんな空気を吸ってどんなものを見ながら生きてきたのか知りたいという好奇心が湧いた。それに応えるように有稔は話を続けた。

「秦部家に入り、秦部の人間として活動するには日本国籍を取得し秦部有稔を名乗るしかなかったんだよ。秦部家の次期当主候補はあまりに無能な人間ばかりで、どこから嗅ぎ付けたのか秦部の人間が京都まで押しかけてきた。そして『不本意だが君の半分は秦部の人間だ。だから秦部の次期当主候補として秦部家に入ってもらおう』と言われ今に至るわけだ。母親は大学への進学に秦部から援助する条件で金を積まれて私を……俺を秦部に売ったんだ」

有稔は眉間にしわを寄せ少々声色が変わった。次期当主として再教育を受けるために金を積まれたことで母親は金に目が眩み……いや、どんな名目であっても金をちらつかせたら母親は目がくらんだらうと有稔は思う。そしてそんなものために売られたことが悔しくてならない。

「……話してくれてありがとうございます。辛いことを思い出させてしまいました。ごめんなさい。でもいつかロシアへ行って有稔さんの生まれ育った土地へ行ってみたいです」

そうだね、と有稔が有紗の頭を撫でれば嬉しそうに目を閉じ、身を任せる。

だが、これが本当に愛する者同士ならば違和感はないのだが、この二人の場合は話が違う。有稔は好きな感情や愛する感情がなくても有紗と結婚できる人間なのだ。この頭を撫でる行為にだってどんな意味も含まれていない。有紗は悲しい気持ちになった。

「社長、一体どういうことですか！ 驚きましたよ。私たちにすら何も言わないで結婚だなんて」

有稔の直属の秘書、伊瀬紀嗣いせかすじは使い込まれた分厚い手帳を片手に神経質そうに中指でノンフレーム眼鏡のブリッジを押し上げながら少々声を荒げていた。それもそのはず、先日の社交パーティーで有稔が結婚したと現当主夫人、秦部聡子に豪語したからだ。それは会社で一番身近にいる伊瀬ですらまったく関知していないことだったので、週明けの月曜から会社は混乱していた。

自分の娘と結婚をと虎視眈々と狙っていた重役、さらに有稔と関係を持ったことのある女性秘書、取引先の社長に令嬢と四方八方から日本最大のグループ会社の社長夫人の座を狙われていた有稔に誰ひとりとして見初められることなく、自分たちにはまったく関知しえない人物とあっさり結婚してしまったのだから半狂乱だ。今頃その相手は誰なのか、まるで犯人探しが如く彼らは目の色を変えていた。

そして社のエントランス付近ではマスコミ各社のカメラマン、記者が警備員と揉めあっていた。もちろん有稔はその件に関しては一切口を割るつもりはなく、その風景に高みの見物をしていた。

「仕方あるまい、急に決まった結婚だったのでね。しかし大河原には話した。伊瀬、お前も奴らのように知りたいと思っっているのか？」

奴ら、とは15階最高経営責任者室から階下を見下ろせば視界に入るハイエナのようなマスコミ。有稔は眉間にシワを寄せた。

大河原おおかわら怜司れいじとは今この場にはいないが、大学時代を共に過ごし、有稔がグループのトップに立つことが決まってから有稔自身が身辺を信頼できる人物で固めたいという意向の元、大河原は人事部から引き抜かれた。それは伊瀬も同じだ。多忙により自由に身動きでき

ない有稔の代わりに、有紗との結婚の件に関して有紗の身辺調査や治療中の父親に結婚同意を取り付けたのも大河原だ。

大河原によれば有紗の父親、豪は少しずつではあるが快方に向かっているようだ。そして結婚の同意を取り付ける代わりに、完治するまでの高額な治療費と有紗の卒業までの学費を有稔個人の財産で全額負担する旨を書面にて約束した。

「社長がお話しにならないことは私どもにとって知る必要のないこと、そのように理解しております」

今にも片膝をつき忠誠心を誓わんばかりの態度と言葉は有稔を感心させた。

フツと笑みを浮かべると伊瀬の方へ向き直る。

「伊瀬は忠義心が強い。お前には話してもいいと思っている」

「はい、何なりと」

「……相手は、高校生だ」

は？ という表情を伊瀬したが、有稔にとってはそれは想定内の範囲内で特に気にすることではなかった。世間一般にはとても普通のことではないのだろう、正気の沙汰ではないということだ。

「それはまた……すっぱ抜かれてもすれば身を滅ぼすことにもなりかねません」

やっと口を開いたかと思えばこれだ。これだから伊瀬は頭が硬いと有稔に言われる。

「身を滅ぼす……それもいいかもしれないな」

「社長！ あなたがいなければ秦部グループは」

「

「それは言わない約束だ。今日は11時から秦菱大附属高校へ視察の予定だろうか？ 車を回せ」

有稔は厳しい表情と視線を伊瀬に向けた。

5 t h からっばの結婚生活の始まり（後書き）

有稔の過去が少し明かされました。お互いのメリットのために結婚したので当然愛情なんてものはありませんし何も期待してはいけないのですが……でもなぜか有紗は悲しい気持ちになっただけですね。この気持はなんなのでしょう。ここまでお読み下さりありがとうございます。次回もお楽しみいただけましたら幸いです。

6th 背徳の高校生活

「有紗、おはよう」

「あ、おはよう、菜月」

はるかわなつき
春川菜月は有紗の親友の一人だ。菜月はいわゆる一般庶民出身のごく普通の高校生で、名ばかり上杉家宗家令嬢の有紗とはよく話が合う。自然と知り合い、親友となった。菜月はうわさ好きの一面もあり会話に華を咲かせてくれる存在だ。

菜月は自分の机に鞆を置いて有紗の席までやってきていつものわさ話を始める。有紗はいつもと変わらない菜月を見て安心した。まだ自分が結婚したことは彼女たちにはばれていないと。高校の全生徒に対して背徳的な感情を持ってしまうことがとても刺激的だった。

「ねね、有紗。ウチの高校の理事が結婚したらしいよ。開校以来一度も姿を見せたことのない理事が、よ」

「え、そうなの？ 知らなかった。ウチにいるのって総長までだもんね。ていうか理事って結婚するような年齢だったんだ？」

有紗は一瞬ドキッとした。結婚という単語敏感になってしまっている。これはいけないことだと、菜月に気づかれないようにそっと深呼吸をし気を落ち着かせた。

有紗の疑問はもつともだ。一般的に理事といえは50代60代が多いと思われるのに、結婚とは。よくいわれる晩婚だったのか。菜月はさらに続けて有紗にだけ聞こえるようにひそひそと小声で話し始める。

「今日の11時に理事が初めて視察に来るんだって。それでね、体

育館でお話するからみんな集合しないといけないんだってさ」

「へーそうなんだ。秦菱始まって以来だね」

有紗はまたいつものうわさ話が高じて半分冗談だと思っていた。

『理事といえはおじさま』という既成概念から抜け出せなかったせいで。そのせいで完全に眩ませられてしまったのだ。だからあまり話に身が入らなかった。

二限目の授業が始まる頃、担任の教師が教室にやってきてなにやら神秘的な面持ちで生徒を着席させた。そして担任の開口一番は。

「今日は11時に理事が初めて視察に来られます。みなさんは11時には体育館に集合するようにしてください。そして午後からは授業風景を視察されますのでしっかり授業を聞いてください！ いいですね」

どうやら菜月が言ったことは本当だったらしい。有紗は創立以来初めて訪れる理事に対しなんてやる気のない理事なのだと思いついた。本当に名ばかり理事で教育に熱心ではないのではないかとさえ思ってしまうのだ。

そう締めくくった担任は意味ありげに有紗を一瞥するとそのまま授業を始めた。有紗はその意味を知ることなくついに11時を迎えてしまった。

「今日はお忙しいところ、ご来校いただきまして」

「お気になさらず。理事として視察することは当然のことです。まあ名ばかり理事ですが」

そんな滅相もございませんと総長は理事を前にしてとても腰が低い。理事が秘書を始め、スタッフで脇を固めていたからだろう、とても存在感があり総長は威圧感を感じて縮こまってしまったらしい。

「さ、こちらが体育館となります」

体育館はバレーコート6面取れるくらい広かった。そこで有紗は上杉なので一番前に出席番号順に並んで全生徒が静かになるまでじっと待っていた。それは全生徒同様なのだが、一人がこそそ話し出すと不思議なもので波及していくものだ。だから全員が静かになるまでじっとしていた。

「さて、みなさんおはようございます。今日はお忙しいところ理事にお越しいただき本校を視察していただくことと以前より計画しておりました。理事は本校にお越しいただくのは初めてのことで、ですからみなさんはしっかり理事のお話を聞き今後の人生の参考になることもお話しただけでしょう。しっかりと聞き今後の今後の人生に活かすようにしてください。では理事、どうぞ壇上ください」

こんなに退屈するのは入学式以来でさっさと終わってくれないものかと有紗はそわそわしていた。そこで思考は中断され、ザワザワと騒々しくなってきたので壇上に目をやった。それは我が目を疑った、目を睜るとそこには夫である秦部有稔が壇上していたからだ。女子生徒は黄色い声を上げ始めたが自制しているようだった。有紗は絶句した。どうしてここにいるのかと、その一言がすべての感覚を麻痺させてしまっていた。いつか言われた『また会うかもしれない』という一言が頭をよぎった。こういうことだったのかと合点が

いったのだ。

壇上した有稔の胸元には今朝有紗が選んだネイビー色のネクタイと薄くネイビーがかかったボタングダウンのカッターシャツ、そして黒に近いネイビー色の背広というスタイル、相変わらずフルオーダーメイドのスーツを身に纏っていた。そして全生徒を一通り見渡す。

「秦菱大学ウチリウネの理事を務めている秦部有稔です。秦部グループという名前を聞いたことのある生徒さんもいらっしゃるかと思えます。私はその会社のCEO、つまり最高経営責任者として会社をまとめています。学校の実質的な運営は総長を始め、多数の先生方にお任せしてきましたが……」

有稔は壇上の下にいる総長を始め教職員に軽く頭を下げた。そして正面に向き直り続きを話し始めた。

「この秦菱大学は秦部財閥解体前に初代総帥がまだ学校の少なかつた時代に『子供たちに教育の機会を、そして世界に羽ばたいてほしい』という理念の下創立しました。その理念は今も変わっていません。みなさんには世界に羽ばたくような立派な大人になってほしいと思います。そのために大きな目標、夢を持ち続けてそれに向かって努力し続けてください。広い視野を持つことも必要です。現状に満足せず貪欲に上を目指していく上昇志向が大切だと思います。これが一番伝えたいことです。それと……」

有稔は置かれた水を飲み、一息つくともマイクを持ちかえ続けて話し始めた。マイクを通じて聞こえる有稔のバリトンの声がとても心地よい、しかし肉声で聞いた方がより心地よいことを有紗は知っている。何を言おうとしているのか有紗にはなんとなく分かっていた。有稔はきれいにぼかして遠まわしな言い方でまとめてくれるだろうと、確信した。

「知っている人もいると思いますが、先日は私的なことでメディアを騒がせてしまいました。政治や経済状況など報道しなければいけないことがたくさんあるにもかかわらず、大きく報道されてしまったことには正直驚き、申し訳ない気持ちでいっぱいです」

否定も肯定もしない実に有稔らしい報告の仕方だった。有紗がフツと笑みを浮かべると有稔は有紗を一瞥し、かすかに笑みを浮かべた。有稔がマイクを置くと一斉に拍手が沸いた。

「さて、理事の方から、ぜひ生徒のみなさんからの質疑応答の時間を設けてほしいという意向の元、15分程度設けさせていただけました。グループのことも何でも質問してくださいということです。質問のある生徒さんは挙手をお願いします」

その質疑応答の中でやはり聞かれたことは結婚相手はどんな人物なのか、これに関して有稔は特に顔色も変えずに淡々ととても可愛らしい人と答えた。それはお世辞であつても有紗にとってはおも嬉しいものだった。だから赤くなつた顔を隠すために体育座りのまま膝に顔をつけ下を向いていた。

他にはどうして若くして会社のトップに立てたのか、という質問。これには有稔も答えるのに困っていた。有紗もその話はまだ有稔から聞いたことがなかつたので興味があつた。先日聞いた次期当主の話とはまた別物だからだ。

「現当主および夫人にグループの統括その他一切の権利行使を任せられました。実力でなつたわけではないと言えますそれが正解かもしれませんが、私以外にも候補はいました。しかし私が選ばれたということは何かしら当主や夫人にとって任せるに足る何かがあつたのでしょう」

とだけ答え、それで15分は経ってしまった。

他の生徒はきつと有稔の人生が充実したものだと思っているに違いないと思うのだ。だが、有紗は有稔が何の苦勞もせずいきなり会社のトップに立ち充実した人生を送っているとは思わなかった。先日のことからも有稔は何をするにも人生バラ色というわけにはいかないのだと分かり始めていたからだ。

そして、どうして有稔が今日ここに現れたのか本当の理由を有紗は知らなかった。しかしその後の総長および担任、さらには学校経営陣の態度を見れば一目瞭然だった。有紗が体育館から退場しようとして彼らの前を通ると明らかに緊張しているのだ。それは有紗に向けられたもので他の生徒には分かりそうで分からない、そんな変化だった。

有稔は高校側に、秦菱大学の創始者が旧秦部財閥であることをいふことに秦部グループの圧力と情報規制をかけたのだ。だから一度も顔を見せたことのない高校でひとしきり伝えたいことを伝え、学校側の要求に応じた、というのが正解らしい。つまり高校側としては圧力と情報規制をかけるのだから秦菱大学の創始者の一族として一度くらい顔を見せろということだ。顔を見せたことが思いのほか反響があり女子生徒に黄色い声を上げられる始末となったが。

有稔が体育館を退場しようとするやと残っていた女子生徒が寄ってきて「秦部グループで働きたい」とか「メールアドレスを教えてください」、さらには「住所を教えてください」という生徒まで。秘書を始めスタッフは彼女たちの対応に困り果てていた。

遊びたい盛りの27歳の有稔の結婚が不思議でしかたないのと、理事と聞いて実は初老の男ではなく若い男が来たことが。「申し訳ない。そういう要求には応じられない」と堅物の伊瀬が。「ごめんね、次の授業視察のために一旦理事長室に戻らないといけないんだ」と大学時代からの信頼できる人物である大河原。

さすがの有稔も元氣すぎる彼女たちには苦笑いすることしかでき

なかつたのだ。

6 t h 背徳の高校生活（後書き）

有稔が高校に乗り込んできました笑 裏話として、前々から教育に熱心ならば一度は高校へ来て生徒を指南してくれという要求があったんですね。以前上げた話の中で「また会うことになるかもしれない」というようなことを有稔は言いました。それがこの場面です。ですからすっぱ抜かれたことで「いらん事言うな」と圧力をかけに来たときに交換条件として指南することになったわけです。情報はすぐに漏れますからね、既の所で止めたという感じですね。次回もお楽しみいただけたら幸いです。

7th 妻としての義務

帰りの道のりでも菜月は有稔の話で持ちきりだった。

「有紗、理事とてもカッコよかったね！」

興奮しながら話す菜月に冷や汗が背中を伝う有紗。

有紗は教室へ戻るまでの道のりで数多くの女子生徒が有稔のことを話していることにいい気がしなかった。今日感じた『背徳的な感情』はもはや消え失せ、代わりに怒りが増していた。手をぎゅっと握りしめ自制していた。

「うん……そうかな……？」

「そうだよ！ 理事のお嫁さんになりたいなー」

菜月のその一言が余計に神経をすり減らしていたのだ。菜月は決して悪くない。有紗と有稔が人には言えない関係であること、そうでなければ今ここで「私たち結婚しているんです！ だから彼の話はいらないで」と言い放っていたらどうだろう。仮にお互いを愛し合っていない結婚であるとしても、それは有紗の専売特許だ。

「……それもいいね」

「どうしたの？ 有紗大丈夫？」

思っていたことが顔に出、声に出ていたのか菜月は心配そうに有紗の顔を覗き込み、手を上下する。そのときの有紗は眉間にしわを寄せ険しい表情をしていたことは一目瞭然だっただろう。菜月は有紗のしわの寄った眉間に指を押しあてるとニタツと笑みを浮かべた。それは「有紗、眉間にしわ寄ってる」ということを示していた。

驚いた有紗は学生鞆を落としそうになり、力を込めた。代わりにフツと笑うと菜月は何も言わないで安心したように有紗の隣を歩き始めた。

有紗には高校へは今まで通り徒歩通学することを約束させた。しかし有紗は一応妻なのだから迎えを超越すなどと言ったので有紗は断固反対したのだ。それに負けた有紗は渋々了承した。有紗としてはこれまでと普通に学生生活を送りたかったし、なにかあつては有紗に迷惑をかけるとわかっていたからだ。

「有紗、今からお茶しようよ。もちろん私のおごりー！」

「ごめん、今日は都合悪くて……また誘って、ごめんね」

「最近の有紗付き合い悪いー、この間まではお姉さんのいる家に帰りたくないって言って誘いに乗ってくれたのに」

そうなのだ。この間までは姉のいる家に帰ることが辛かった。帰れば辛く当られ罵倒されていたから、それらから逃れられるならと菜月の誘いに乗っていたのだ。しかし今は状況が違う。いつ何時妻としての仕事をしなくてはならない時がくるかもしれないと想定して、いい妻を演じるために有紗のマンションに帰り有紗の帰りを待つのだ。

菜月の誘いを断ることはそれはそれで辛く心が痛んだ。菜月に淋しい思いをさせたことについて今は有紗自身の状況を説明することはできないし、隠し事をするのも辛く菜月に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「うん、時期が来たら話すから……今はそういうのちょっと無理なんだ、菜月を嫌いなわけじゃないよ。むしろ好きだよ。ちよつと家庭の事情で……」

そう言ってお茶を濁すことで精いっぱいだった。菜月は聞きわけ

がいいのですぐに笑顔になると有紗の頬を軽く引つ張り「わかつてるよ、またね」そう言っつていつもの分かれ道で菜月と別れた。

最近の有紗はおかしい、たしかにそうだ。思い返せば有稔の過去を聞いたときからだっただろうか、他人事とは思えなくて真剣に聞き入ってしまったと有紗は感じていた。極めつけは有稔に頭を撫でられて複雑な感情を持つてしまったことだ。有稔は頭を撫でる行為に関して特に気にしていない様子だったが、有紗にとっては気になってしまふのだ。有紗の過去も話せば辛いものに違いないが、有稔の話に親近感を覚えたことも事実だ。

「上杉さん！」

ひとしきり考えを巡らせて菜月と別れ一人で帰っているところへ、振り返ると同じクラスの上原^{つえばいちはぎ}知明が後方から息を切らせながら走ってやってくるのが見えた。上原知明はバスケットボール部所属で一年生のうちからエースを勝ち取ったという競争心が強く負けん気も人一倍強い男子生徒だ。知明はキリツとした眉が印象的で、中学生の頃からバスケットボールを続けていたせいかわも高い。そして制服を着崩すことなく、さわやかな笑顔を有紗に向けた。

「上原くん、どうしたの？」

「あ、俺の名前知ってたんだ」

「うん、クラスメイトの名前と顔は一応一致するよ」

そんな知明は頭を掻くと「参ったな」と呟いたのだ。なにが参ったなのか、有紗は首をかしげた。

「なにが参ったなの？」

「いや、クラスメイトの名前知ってることとか、俺の名前知ってるなんて思わなくて。それと今日は上杉さんと帰りがかった」

「そうなんだ、うちはもうすぐだから少しの間になっちゃうけど」
「それでもいいよ」

有紗と上原知明は分かれ道まで歩き始めた。知明は決して有紗の前を歩くことなく息がぴったり合ったように有紗の歩幅に合わせて隣を歩いていった。それに気付いた有紗は、有稔が隣を歩いていたら彼はどのように歩くだろうかと考え始めていた。有紗より先を歩くか、後ろを歩くか、隣を歩くか。はたまた有紗の手を引つ張りながら歩くのか。

「上杉さん！ 危ないよ！」
「？」

気付けば少し甘い香りのする知明に体を預ける格好になっていたのだ。何が起こったか理解できていない有紗に向かって知明は深く呼吸をするとまるで幼い子供に言い聞かせるように口を開いた。

「上杉さん、ちゃんと前見てなきや。もう少しで轢かれるところだったよ」

「ごめん……ありがとう」
「俺が上杉さんに車道側を歩かせてたのが悪かった。気をつけるよ、ごめん」

体型に似合わず力強く引つ張った知明に有紗は終始驚きっぱなしだった。そして車道側を歩かせていたと反省し知明が気遣ってくれたことに対して有紗は嬉しかった。

「上原くんて優しいね、女の子が放っておかないと思つよ」
「……そうかな。あまり嬉しくないよ」

ぼそつと呟いたことは有紗に聞こえることはなく、知明は困ったような視線を有紗に向けていた。有紗はその困ったような視線にどう応えたらいいのか困惑していた。これもこれまで異性との交流がなかったせいかもしれない。

その後、知明と有紗は別れると有紗は一目散に小高い丘にある一際目立ち人目を引くブリリアント・リバーへと駆け込んだ。有紗の知っている誰かに会わないように、見つからないように。そしてエレベーターに乗り部屋に近づくにつれ胸が高鳴った。

相変わらずリビング・ダイニングのガラス張りの壁からは若葉市が一望できる。初めて来たときは夜だったために夜景を望めたが、昼間の若葉市もなかなかよい眺望で、夜景に劣ることはない。リビング・ダイニングのソファに学生靴を置き、寝室のベッドに横になった。有紗は疲れきっていた。ストレスも溜まった。だから少し休むために寝ることを選んだのだ。それに有紗が帰ってくるのは夜遅い、起きていても予習復習以外にすることがないのが正直なところだ。

帰りが遅いということはどこかの女性とよろしくやっているということだろう。家庭を省みない男の典型だ。それなのに律儀に条件を守り健気な妻を演じる有紗は彼の目にはどのように映るのだろうか。

「……………」

「ん……………」

名前を呼ばれた気がした有紗は目を開けると夫である有稔が有紗の顔を覗き込んでいた。今日も相変わらずきれいな顔を有紗に向けてる有稔。本人にはその自覚が全くないようだが。

時計を見ると23時を回っていた。かれこれ6時間は寝ていたというところらしい。

「あ！ 夕食！」

律儀でお利口な妻を演じるためにはその過程が必要だと有紗は考えていた。ベッドから跳び起きるとキッチンへ駆け込もうとしたところを寸手のところで有稔に阻止された。

有稔を見上げるとなぜか眉間にしわを寄せじつと有紗を見据えていた。

「有稔さん……？」

心配になった有紗が声をかけても更に険しい表情になるだけ。原因が分からない有紗はただただ戸惑い後ずさることしかできなかった。しかし有稔は一定の間隔で距離を詰めてくる。それが今はとてもない恐怖心を煽った。

「君は妻としての義務も果たせないのか」

「つ、妻の義務……？」

たしかに夕食を作らなかったことは反省されてしかるべきだろう、しかしそれだけで義務を果たせないなどと言われなければならぬのだろうか。

後ずさった有紗はついにベッドルームのガラス張りの壁に背中をついた。壁は冷たく、今の有稔の心の内を映しているようだった。有紗を見下ろす目が今はとても冷たい上にいつもの心地よいバリトンの声は怒りを含みとても低い。

「有紗、これは君の香水ではないだろうか？ 男と寝たのか。そんな貞操観念の低い汚い女だったとは……」

有稔は制服についた香水のことを言っているらしい。有紗は香水

などつけることはないので有稔の言う香水に心当たりなどない。しかし貞操観念が低いと言われ有紗は自分の母親を思い出したのだ。そして顔面蒼白になった。自分は母親とは違うのだと今の有稔に言っても分かつてはもらえないだろう。

有稔は有紗の制服のリボンをぐつと引つ張る。反動で有紗はつんのめってつま先立ちになり有稔の顔が近くなり怖くなつた有紗は顔を逸らせた。

「私……そんなこと……ずっとここで」

疲れて寝ていただけなのに。有稔はこの部屋に男を連れ込んでよろしくやっていたと言いたいのだろう。仮にもこの部屋は有稔名義で購入したマンションだ。事実そのようなことをしていたならば即刻追い出されることは違いない。だが、それは事実とは違う。

「君と結婚したのが間違이었다」

有稔は下等生物を見るが如く目を細めて見下しそう静かに吐き捨てた。今日の高校視察での「可愛らしい人」発言はなんだつたのか、あのときの有稔は決して嫌な顔をして言っていなかった。それなのにこの変わり様はなんなのか、有紗は困惑するばかりだった。

7th 妻としての義務（後書き）

有稔は怒り狂っていますね笑　そしてとんだ勘違いをなさっておられる。これが事実ならば自分名義で買った部屋でそのようなことをされては激怒しますし叩き出すでしょうね。
さてさてこれから有紗と有稔は歩み寄れるのでしょうか。

8th 幼妻の家出

「私との結婚が間違いだった……？」

「ああ、そつだ。間違いだった」

今の有稔には何を言っても聞かないだろう。

「誰とも寝ていないし、私ずっとここにいた。何も知らない」

困惑した有紗は自分が何を言っているのかももう分かっていたいなかった。そして込み上げた涙が頬を伝った。香水に心当たりのあった有紗は弁解しようとしたが、有稔がリボンタイをさらに強く引っ張ったので言うことができなかった。

「さあ、どうだか。もしそれで子供ができてもしそれは私と君の子でないことはお互いがよく分かっていることだ。君が私の妻としてここにいたいなら始末くらい訳ないだろう。身持ちの悪い小娘は嫌いだ」

有紗は有稔とは結婚したくて結婚したわけではない。仕方なく結婚したのだ。それは有稔も分かっているはずだ。『妻としてここにいたいなら』この表現にはいささか疑問だ。

そもそもこれまで有稔が有紗と関係を持たなかったのは、出会ってすぐに結婚したのだから当然どんな人物かは分からないから様子見をしていたのだ。他人の子を掴まされるリスクを回避するための策だったのだ。お互いキスすらまともに交わしていなかったし、性的関係も持ったことはなかった。本当に形だけの夫婦だった。有稔にしてみれば他人の子を掴まされるなんていう面倒くさいことは真っ平ご免被りたかった。

有紗は震え、唇を噛み、有稔のリボンを掴んでいる左手にそっと冷たい手を添えた。

「ゆ、有稔さん、私……子供はいりません。だからもう怒った顔しないで、怖い……」

有紗はひざから崩れ落ちると泣いた。半ば有紗と有稔との間の子供はいらないという旨を有稔は言いたかったのだろうと察した有紗は、まるで自分が妻として役割が不足していると突きつけられたと思っただのだ。しかし今は出て行ってもこれから住むところも寝る所もない状態では、子供はいらないの一択しか選択肢がないことはよく分かっていた。昨日までの楽しい時間はどこへ行ってしまったのだろうと、涙した。

有稔はリボンを掴む力を緩めると、自身のネクタイを緩め、上着とともにベッドへ投げ、何も話すことなくリビング・ダイニングへと姿を消した。自分ではその有紗に対するもやもやしたものが嫉妬であることは薄々感づいていた。こんな小娘に興味を抱いてしまったことを肯定したくなかった。

そして有紗が『香水の主』と関係を持ったことはないことも、有紗を見ていれば分かっていたはずなのに傷つけてしまった。顔も知らない『香水の主』に嫉妬してしまった、ただそれだけのことで有紗を泣かせ、拳句、一回りも年下の16歳になったばかりの少女に子供はいらないと言わせてしまったのだ。まるで自分の方が子供のようで見つともなかった。

「何をやっているんだ俺は……有紗を泣かせて」

有稔はグラスに水を注ぐと一気に飲み干した。今日の理事を務める秦菱大学附属高等学校への電撃訪問では、体育館からの去り際に女子生徒が、小娘が色気づいて寄ってたかつて有稔に媚びようとす

る姿に吐き気が込み上げ苦笑いすることで精いっぱいだったことは、有稔以外の秘書を始めスタッフの知るところではなかった。今まで誰かれ構わず関係を持って吐き気が込み上げることなどなかったのに。

「気持ち悪い……」

目を閉じれば蘇るすべての光景に吐き気が込みあげた。

有稔はシャワーを浴び、ベッドルームではなくリビングのソファに横になるとそのまま眠りへと落ちていった。有紗のいるベッドルームへは入ることができなかったのだ。

一方の有紗は有稔が寝静まったのを見計らって、有稔が掴んでしわの付いてしまったりボんタイとセーラー服を脱ぐと、洗面台の鏡に向かって泣き明かした後無理やり笑顔を作ってみたがひきつってすごく不自然だ。そのままシャワーを浴びて持ってきた服の中でもそのまま外へ出ていけるものを選んだ。これから寝ようとする人間の着る服ではないことは一目瞭然だ。髪を乾かし、後ろでひっ詰め時計を見るとちょうど深夜12時を回ったところだった。有紗は深く呼吸すると覚悟を決めたように携帯電話である人物に連絡と取る と電源を切った。足がつかないようにするためだ。持ってきた荷物を肩から斜めに提げるとローファーでないカジュアルシューズを履くと部屋のドアをそっと開け姿を消したのだ。

「有紗、こんな時間に電話してくるだなんて、どうしたの？ またお姉さんとケンカ？」

有紗は公園に菜月を呼び出し、今日一日でいいから菜月の家に泊めてほしいと懇願したのだ。そんな菜月は有紗が真季とケンカ中であると思っただけ。本当は有稔と同じ空間にいたくなくて出てきたなど口が裂けても言えない。

「急にごめんね、ちょっとごたごたしてて……菜月の家に泊めてほしいなんて無茶言っでごめんなさい」

「いいよ。うち今日は両方とも親いないし、だから安心していいよ。でも明日が休みでよかったね」

有紗と菜月は菜月の家に向かって歩き始めた。夜風に当たると少しは気持ちも楽になるだろう、そう思っていたが菜月と一緒にいたほうが気持ちが安らぐことを実感した。15分ほど歩いたところで菜月の家に到着し、家上がった。

菜月の家はごく普通の一般家庭の様相を呈していた。有紗が母親とともに過ごしていた家とは言い難い寂れたアパートよりも豪華なものだった。そしてブリリアント・リバーよりもこじんまりとしていた。ただ有紗だけが住む世界が違つと言っただけの話だ。

「有紗、夕食食べた？」

「あ……」

有紗との一件の前から何も口にしていなかったことに今更気づく。その様子を見て菜月は「なんだ、食べてないんじゃない」と笑つと、レトルトのリゾットを温めて有紗に食べるよう促した。

「はい、こんなのが出来ないけど……食べて」

「ううん、すごく嬉しい。ありがとう。菜月優しいね」

「何言ってるの、それ今更だよ。私はいつでも優しいんだからね！」
「菜月のそういうところ好きだよ」

有紗は食卓のテーブルに着くとスプーンで温まったばかりのリゾットを口にした。菜月は有紗の向かい側に座り有紗の食べる様子をこにこしながら見ていた。

「ねえ、菜月……将来子供欲しいと思う？」

有紗が精一杯考えて口にした言葉はそれだった。

「なにいきなり！ びつくりするんだけど。子供……たしかにいいかもね、一人くらいいてもいいんじゃない？ ていうか私たちまだ16歳なんだけど、結婚とか早いし子供なんてまだまだでしょ。そんな有紗は？」

「うん……」

有紗はリゾットに視線を落とすしどう答えるべきか思案していた。一般的には16歳での結婚は早いという感覚らしい。それが普通なんだと有紗は思う。自分だけが普通でないことをしてしまったのだ。罪悪感に苛まれた有紗は菜月と同じ立場に戻りたいと思った。このまま菜月にあの話をしてもおつか、そうすれば菜月はどう思うだろうか。

「なにがあつたの？ 話してよ。この間から有紗ちょっと変だよ」
「うん……」

菜月には有紗の様子がおかしいと気づかれていたのだ。それもそのはず、最近生返事が多くなったことが原因だろう。そして心ここにあらずという場合が多い。そういう変化に気づく菜月は洞察力やそれに類するものが鋭いのかもしれない。

「時期が来たら話すから……今は待つてほしいんだ。気持ちの整理がつかなくて」

いつか菜月にばれてしまうのではないかとなるべく感情を表に出

さないようにいつもの有紗を装うことにした。

「そっか、早く解決するといいね。私は有紗の笑顔が見たいだけだから、ね。辛いことがあったら遠慮無く言ってね」

「うん、ありがとう」

それ以上詮索しなかった菜月は有紗の手を取ると有紗のそばまで行き軽く抱きしめた。そのまま二人は菜月の小さなシングルベッドと一緒に眠った。いつもは大きく冷たいダブルベッドで一人で眠っている有紗にとって今日は誰かがすぐ隣で寝ている、それが有紗を安心させた。

しかし有稔と離れたこんなときでさえもあの大きなダブルベッドでこのように眠ってみたいと頭をよぎり涙しそうになった。あれだけ罵倒されたのにどうしてここに有稔が出てくるのか。今頃有稔はどうしているだろうか、まだ眠っているだろうか。はたまた有紗が出ていったことに気づき捜しているだろうか。もしくはもう放置されたままかもしれない。そういえば今日は有稔は朝が早かったはず。有稔は会社を背負う責任重大な立場であるのに有紗のことにはかり構ってはいられないだろう。自分がこんなことをしたせいで会社の業務に支障が出たらどうしよう。そのことにより社長職を解任されたらどうすればいいのか。社会に対しての視野が狭い有紗は有稔が解任された後どういう処遇を受けるのか全く分からなかった。

『有稔さんごめんなさい』

と返信に希望の持てないメールを送って電源を落とした。考えるのは有稔のことだけであることにまだ有紗は気づいていない。

8 t h 幼妻の家出（後書き）

有稔にメールしちゃった有紗ですが、歩み寄りのためのきっかけはできたのではないでしょうかね。次回はあの人が登場予定です。

9th 婚約者の再来

二日後、有稔が黒いカッターシャツと白いズボンに着替えているところへ部屋のチャイムが鳴り響いた。ブリリアント・リバーはエントランスから暗証番号入力式のセキュリティを採用していた。この暗証番号を知っているのは身内か有紗くらいだったが、有紗でないことは容易に予想がついた。

ドアを開けるとそこにはいつか顔を合わせた自称婚約者の神戸純玲^{みれ}が一人。今日も巻き髪をして清楚を装っているのがわざとらしい。

「おはようございます、有稔さん」

「……ああ、そうだね」

有稔は純玲のその甲高い声にあからさまに不機嫌な表情になる。どうやってここまでたどり着いたのかはすぐに分かった。およそ聡子から聞き出したというのが正解だろう。何のために来たのか、それは純玲にしか分からないことだが。

「有稔さんの奥様はいらっしゃるかしら？」

「あいにく、今彼女は留守だ」

なるほど、純玲がここへ来た理由を把握した。どうやら有紗の顔を見たいらしい。不幸中の幸か、有紗は今いないせいで純玲に有紗を見られる心配がなくてよかったと、心中複雑ながらもホツとした。

「まあ！ 朝だというのに奥様いらっしゃらないの？ 奥様とお茶をしたくてお菓子を持って参りましたのよほど奔放な方なのね。上げていただける？」

純玲の口角を上げ、『奥様』を見下す態度で有稔に接触するところを見れば、実にしたたかだと言わざるを得ない。有稔は「少し待ってくれ」と、いったん純玲を外に待たせ、ドアを閉めチェーンロックを外すまでの間に有紗の制服や学生鞆はクローゼットの中へ、ローファーはシューズボックスの中へ、有紗のものだと分かるものはすべて隠した。そしてその作業が終わると純玲を渋々部屋に上げリビングへ通した。

「素敵なお部屋ね！ 若葉市が一望できるなんて、とても眺めのいいマンションを購入なさったのね」

純玲はガラスに張り付き、一望できる若葉市を楽しんでいるようだった。神戸家のそれは有稔宅のそれとは比べものにならないほど豪勢であるはずなのに、何からなにまでわざとらしく有稔の不機嫌はより一層積み重なった。

そんな純玲の下心を読んだ有稔はさらに不機嫌になりソファにどかっとな腰掛けた。

「君はおばあ様の差し金か？ 悪いがその手には乗らない」

「私まだなにも話していませんでしょ？ 有稔さん怖いです。あ、せっかくですからこのお菓子召し上がってくださいな」

そう言い、純玲は持ってきたバスケットからクッキーやマドレーヌが入った紙袋を取り出し、それをガラス製のテーブルに置いた。

「あ、そうだね。コーヒーか紅茶いれなくてはいけませんね。キッチン貸していただけ？」

ここまで我が物顔で部屋を徘徊する人間はそうそういないだろう。純玲のその厚かましさに苛々し始めていた。

仮に純玲が妻だった場合を想像してさらに苛々していた。

「そんなことはどうでもいい。早く用件を言いたまえ」

純玲は座っていた大理石の床で姿勢を正すとさつきまでとは打って変わって無表情で話し始める。

「本当は私と結婚する予定なのよ。秦部グループと神戸家の強固な繋がりは必要でしょう？ 私と有稔さんが結婚すれば一族の繋がりはさらに強固なものになる。代々秦部家は外部の血を入れなかったこと、それはあなたもよく分かっているはずよ。まあ言ってしまうばあなたも外部の人間なのだけれどもそれとこれとは話が違いわ」

純玲は有稔の反応を楽しんでいるようだが、有稔は横目で純玲を見て軽く流した。

「早い話が、再従妹である君と結婚しろと。そういうことか？」

「ええ、そういうこと。この件は当主も聡子おばあ様も他の構成員も、全員が望んでいることなのよ。　こんな16の小娘とお遊びはほどほどになさったら？　火遊びが火事になる前に」

そう言って純玲が差し出したのは有稔周辺を嗅ぎ回って集めた資料だった。おそらく聡子が純玲が優秀な探偵を雇い、有稔周辺を嗅ぎ回っていたということだろう。それが純玲に知られてしまったのだ。

有稔はポーカーフエイスを装い、その資料を手に取り斜め読みした。有紗のパーソナルデータを始め、名ばかりではあるが宗家の出身であること、他に有稔の知らない情報が無機質なパソコンの文字で記載されていた。有稔はある程度は有紗の周辺を調査してはいたが、いかんせん仕事に追われ調査結果を隅々まで見ることはなかつ

た。

「これは私が勝手にやったことです。まだ聡子おばあ様にはお話ししていません。これを見たらおばあ様、卒倒されるでしょうね。まさか一回りも年下の小娘に手を出したなんて思いませんもの。一応忠告のつもりで先にあなたにお話ししたんです」

純玲はまだ自分の付け入る隙があると思ったのか往生際が悪い。まるで負け犬の遠吠えのように滑稽だ。

「で、それが悪いことだと？　そこまで調べたなら、もちろん戸籍の閲覧もしたんじゃないのか。彼女と私は法律上の手続きを踏んだ上で結婚した。よって君は私の妻にはなりえない、以上だ」

まったく悪びれる様子もなく、むしろ毅然とした態度で開き直ったように資料を尻目に法律婚を盾に取り純玲に吐き捨てたのだ。有稔は余裕で構えていた。有稔は離婚の意思など持ち合わせていなかったのだから。

日頃から次期当主問題でうるさい聡子と純玲を黙らせるために偽装結婚をしたのだから、まだ離婚する気などさらさらないので。これでは偽装結婚した意味がなくなってしまふ。

純玲は怒りとおそらく悔しさを滲ませ、唇を噛み、有稔から資料を取り上げると足元に置いていたバッグを勢いよく掴み部屋を出ていったのだ。

うるさい純玲が出ていったことを確認したところで有稔の携帯電話が鳴り響いた。

「ああ、そうか。よくやった。早急に連れ戻すんだ、たとえ抵抗してもだ」

電話の相手は有稔がもつとも信頼を置く大河原怜司だ。有稔が有紗を捜すよう指示してから、ここ二日の大河原は仕事の合間を縫って捜索に奔走していたのだ。ここで警察を使つては、ますますマスコミが有稔や有紗の周りを嗅ぎ回ると判断してのことだった。

その分、伊瀬紀嗣いせかすしの仕事量は増えていたが。

この一件から有稔は常に目の届く範囲に有紗を置いておくべきだと痛感したのだ。

「春川菜月さんのお宅ですね。上杉有紗がお邪魔しているかと思うのですが、呼んでいただけますか」

そこには黒いスーツを身にまとった大河原がいた。この件に関して大河原は単独行動をしていた。単独行動だとやりにくいことも多々あるが、下手に情報が漏れるよりはましだと思つてのことだった。有無を言わさぬ口調と目つきで菜月を威圧し、有紗を引きずり出そうという作戦だ。高校への電撃訪問のときとはまるで人格が違つようだ。

「春川菜月は私ですが、どちら様ですか」

玄関先に出たのは菜月で、有紗が春川家にいることを知っている人間がいることを疑問に思い、有紗がいることはあえて言わなかった。

「CEOだと伝えていただければ話は通じます」

菜月は大河原が怪しいと思ったのか大河原の上から下までひと通りじっと見ると二階へと姿を消した。

そして菜月の部屋にいる有紗にCEOの件を伝えた。そうするとたちまち有紗の表情は強張り、全身を小刻みに震わせていた。

「わ、私……いやだ、帰りたくない」

「CEOって有紗、最高経営責任者のことでしょ？ 一体何したの？」

菜月にはれるのも時間の問題かもしれない。有紗の直感だ。

「……」

そこへいつまで経っても有紗が下りてこないで痺れを切らせた大河原が何の断りもなく二階へ上がってきていたのだ。そして有紗を見つめるや腕を掴んで立たせ勢いよく引っ張って階段を下り、お騒がせした、とだけ菜月に伝えると春川家を出た。

「あなたのせいで仕事が台なしですよ」

大河原は毒づきながら社用車BMWセダンに有紗を押し込めるとアクセルを踏み込みブリリアント・リバーに向けて発車した。

家出が不完全に終わってしまったことや、何をしても絶対連れ戻されてしまうこと、逃げられないのだと思うと込み上げる嗚咽を堪えたものの一筋の涙が頬を伝った。だが、今の有紗には有紗を拒絶することなど出来はしないのだ。

否応なく確実にブリリアント・リバーに近づく。有紗は車窓から若葉市の流れるような風景をただぼんやりと眺めていた。リアシートに乗っている間、有紗も大河原も一言も言葉を口にするこなく

到着までの15分程度を沈黙が支配した。

二日ぶりに見るブリリアント・リバーは相変わらず人目を引く外観で、まるで有紗の帰りを待っているようだった。部屋の前まで着いてきた大河原は有紗に一言耳打ちすると、失礼します、と姿を消した。

誰もいなくなった最上階30階フロアには有紗がただ一人、暗証番号を入力しロックを解除すると部屋に入った。朝の10時だというのに部屋はそれ相応の明るさではなく、唯一ガラス張りのリビング・ダイニングだけがとても明るく感じた有紗だった。

9 t h 婚約者の再来（後書き）

あの人……純玲嬢の登場です。純玲嬢は高飛車なイメージなのでそんな感じで読んでいただければと思います。

個人的に大河原くんは二面性を持っていると思います笑
有稔には忠実で有紗には冷たいのだけれど。

いよいよ次回でこのお話も二桁です！（実は嬉しい）

10th キスに託した独占欲

「有稔さん……」

有紗はリビング・ダイニングを見回し小声で名前を呼んだが有稔の姿を見ることができなかった、代わりにガラステーブルにはお菓子の入った紙袋が置いてあった。誰かがこの部屋を訪れたということだろう。もしくは有稔本人がお菓子を作ったか。その考えは即刻除外した。

その空間を出ると二人の寝室と決めたりビング・ダイニングを出てまっすぐ突き当たった約10帖の部屋へと向かった。ドアを開けるとそこにも有稔はいなかった。ついに有稔自身が有紗の元から離れていってしまったのだと一抹の不安がよぎる。姉の真季に突然突き放されたように、有稔にも突き放されてしまったのだと思わずにはいられなかった。真季に突き放されたときも有紗は自身がもう少し歩み寄る努力をしていればよかったのにしなかった。そうやって辛くなったら逃げるのが当たり前になっていたことを有紗はこの時初めて知った。

「有稔さんいないんですか？」

有稔にだつて逃げるような真似をしなければもう少し結果は違つたかも知れない。気づいたら半狂乱になり有稔の名前ばかり呼んで泣いた。有紗は寝室に入つてすぐの場所で座り込んで肩を震わせ、ついに短い仮面夫婦生活にピリオドが打たれたのだと吃逆^{さぐり}泣きした。

『学校みんなに嫉妬したの、有稔さんを見られなくなつたの』

それはようやく分かった有紗の本心だった。秦菱大学附属高等学

校の理事として電撃訪問したときの女子生徒の目色が違うことに嫉妬したのだ。有紗はあくまで『上杉有紗』として通っており、『秦部有紗』を名乗れないことにもどかしい思いをしたのだ。彼女たちが色目を使い寄りついてもじっと耐え見て見ぬふりをするからこそかできないことが辛かった。これも偽装結婚をうまく隠すためには仕方のないことだったのに。そしてこれは愛情のない偽装結婚であったことを強く胸に刻み嫉妬を切り刻み無に返す、この繰り返しだった。

「有紗」

有紗はどこかに行ってしまったのではなかった、寝室の手前にある書斎に籠もっていたのだ。ただどの部屋も防音設備が整っており有紗の声が聞こえなかっただけだった。

そんな寝室を入れてすぐの場所で吃逆泣きした有紗の泣きはらした顔を見て有紗はしゃがんで「おかえり」と有紗を抱き寄せた。そんな安心した有紗は有紗の背中に腕を回した。

「俺の元を離れられると思ったのか」

有紗の声は少し怒りを含んでいたが、それでも優しさが込められていた。

有紗の元を離れられるかと言われると離れられはしない。こつやつて帰ってきたのがいい証拠だ。

「……少し」

有紗が見る有紗の顔は涙で滲んでしまっただけでぼやけて見える。

「もう逃げるような真似はしないな？」

「……しません」

これは有紗の決意だ。有稔との結婚については脅されて結婚を迫られたのは事実だが、同意したのは有紗だ。だったら最後まで自分のすべきことを為すまでだとの結論に至った。

「いい子だ。まともに食事していないだろ、これ食べるといい」

有稔はそれ以上有紗を咎めることはなく、リビング・ダイニングへ有紗を連れて行くとガラステーブルに置いてある紙袋に入ったお菓子、純玲が作ったものだ、それを有紗に渡した。有紗は袋の中からドライフルーツがたくさん入ったマドレーヌを取り出し、一口一口噛みしめるように食べた。洋酒のツンとした匂いが腔内に広がる。マドレーヌを一つ食べてしまったところで次の手を止めた有紗。その顔にはうつすら赤みが差していた。

「あれ……」

食べている間、有紗は大理石の地べたに座り、その隣には有稔がいて有紗は左手で有稔のカッターシャツの裾を掴んで離さなかった。

「どうした、どこか調子が悪いのか」
「……」

有稔が返事のない有紗の顔をのぞき込みその変化を読み取る。有紗は目が虚で少し呼吸が荒い。おそらくマドレーヌに含まれる洋酒に酔ったのだと思い、紙袋に入ったもう一つのドライフルーツがたくさん入ったマドレーヌの匂いを嗅ぎ確信する。そして朝の出来事を振り返り、純玲がわざわざ菓子を焼いて持つてくること自体がおかしいと思わずにはいられなかった。純玲が有稔宅を訪ねたのが午前8時、それまでに普段寝起きの悪い純玲が菓子を焼くだろうか、

なにか下心があつて早起きし作つたということだろう。そして有稔は酒に弱い。

そのようなことから鑑みるに純玲は有稔に洋酒たつぷりのマドレーヌやクッキーを食べさせ、『既成事実』を作り上げる算段だつたのだ。しかし有稔はそれらを食べることなく純玲を追い出してしまつたので純玲にしてみれば不発に終わつたといふところだろう。

「ゆうじんさんはわたしの旦那さんだから……誰にも渡さないのお」
「有紗、しつかりするんだ」

有紗は讒言（ていごつ）のように同じ言葉を繰り返していた。酔うと本音が出るというもので有紗ももれなく酔つた勢いで口をついて出たそれは有稔を戸惑わせるには十分だつた。

「ゆうじんさんの帰りが遅くてもお、いい子で待つてるのお」

このとき有稔は自分の過ちを恥じた。たかが香水にいい年した大人が嫉妬してしまつたのだ。有紗は有稔の帰りが遅いときもずっと部屋で待つていたのだ。条件として有稔から離れることを許さないことを付してしまつたばかりに有紗は一人でこの広い部屋で夜遅くまで待つていたことを思うと、胸を締め付けられた有稔。あの夜も、その前の夜もたつた一人ですつと帰りを待つていた有紗。

「他の男と恋愛することも言わなければ分からない話なのに、バカな有紗」

それきり有紗は有稔の腕の中で眠りに落ちた。規則正しい寝息を立てる有紗は16歳といつてもまだまだ子供だ。寝顔にはあどけなさ幼さが残り、大人の事情を理解しろという方が無理があるというものだ。仮面夫婦生活と外で恋愛をすることなど両立できるほど有

紗は器用ではない。

「有紗、君は俺とずっとここにいるべきだ」

有稔が人前で『俺』と言うのは有紗の前だけだということは有紗に対してはほとんど壁を作ることなく、有紗に心を許しているという表れだった。一方で聡子や純玲を始め有紗以外の秦部の人間には一定の間隔で壁を作り、それ以上は決して立ち入らせない、これは有稔の一種のポリシーでもあった。それもそのはず、有稔が生まれて28年経つが、いまだに有稔の母親とロシア人の父親の結婚を認めていない聡子のことだ、有稔のこととて認めているはずはない。

ロシア人の父親譲りの髪色と瞳の色に聡子は有稔の父親ニコライの影を見るたび嫌悪感を示すのだ。せめて日本人としての体裁を整えさせるべく有稔にはロシア国籍から日本国籍を取らせ秦部姓に改めさせた。さらに当時ロシア語しか話せなかった有稔に日本語と英語教育を徹底させた経緯がある。

そのことからユージンではなく有稔としてならば一定の範囲で認めてはいるが、ユージン本来の人格を否定されていると感じるようになり距離を置くようになった。

いつしか『仮面夫婦』が『夫婦』として一歩ずつ確実に歩みを進めていることを今の二人はまだ知ることにはなかった。

確実に本邸へ向かわねばならないことと、すべてと決着をつけなければならぬ日が近づいていることを認識している有稔は有紗の額と頬にキスを落とすとした。

「聡子おばあ様、ただいま帰りました」

有稔にとって再従妹はしくいである純玲は有稔との結婚が決まるまでの間、秦部家本邸に滞在している。聡子の部屋に今日の成果報告のために訪れていた。

成果といっても実際には有稔の部屋に『紙袋』を置いてきただけであり、本来は中身を食べさせて『既成事実』を作り上げてから帰るつもりだったが、有稔の予想外の行動によりその前に追い出される結果となったため不発に終わったが。

「純玲さんですか、どうぞお入りなさい。お茶を入れましょう」

純玲の祖母であり聡子の妹である神戸洋子かんべようこと秦部（旧姓神戸）聡子は、神戸財閥の三代目総帥の娘として生まれた。三代目には男児が生まれることはなく聡子か洋子のどちらかが神戸家に残り、婿養子をとると三代目は決めていた。

聡子は政略結婚ではあったが、秦部家現当主との結婚にあたり秦部家へと嫁いだ。しかし聡子としては神戸家に残り、婿養子をとるのは自分であるべきだったのだ、という自責の念に常にかられ、婿養子をとった洋子が数年前に亡くなってから洋子の孫娘である純玲を洋子への贖罪のように本当の孫娘同然に可愛がっている。

そして純玲は聡子を実の祖母のように慕っている。

「有稔さんの様子はどうでしたか？」

「ええ、何の問題もございません。少し時間がかかるかもしれませんが、私にお任せください」

純玲は資料に載っていた例の16歳の少女を思い出し、奥歯を噛み締め、拳をぐっと握りしめた。純玲にしてみれば前々から婚約者は自分だと言われてきたにもかかわらず、有稔はぼつと出の子供と

結婚してしまった。しかし子供に負けるわけにはいかないと純玲のプライドが許さないのだ。なんとかして有稔を自分のものにすべく頭をフル回転させていた。

聡子はダージリンティーを入れたカップを傾け次に何を言うべきか逡巡していた。

「有稔さんはパーティーでは結婚をほのめかすようなことを言っていましたね」

聡子は今回のパーティーでの一件を純玲に話し、純玲の意志がどれほど堅いものか試そうとしていた。

「私は有稔さんの婚約者です。聡子おばあ様にご心配をおかけすることはございません。有稔さんと私の結婚で秦部家と神戸家の繋がりを強固なものにいたします。これもすべて秦部家と神戸家のためですもの、私に出来ることは何でもします。当然のことですわ」

純玲の決意は聡子が想像していたものよりも堅かった。

10th キスに託した独占欲（後書き）

帰ってくる場所ができる、あるいはあるというのは精神的に心強い
ものです。

嫉妬したという事実はようやく理解した有紗ですが、有稔に想いを
寄せる日は来るのでしょうか……？

11th 奥様と婚約者

有稔と有紗が結婚して数ヶ月経った7月のこと、それは起きた。

その日、有稔は28歳の誕生日を迎えた。相変わらず世間一般には『パーティー』に関しては公表されておらず、一切がベールに包まれたままだった。唯一、純玲にだけは知られてしまったが。

現当主や聡子が、有稔の誕生日にあわせて『Hatabe green hotel』で誕生パーティーを主催すると6月のうちに有稔に知らせており、その日が近づくにつれ有稔だけでなく、なぜか有紗も憂鬱になっていった。

『7月のその日は有稔さんの28回目の誕生日でしょう？ それに

“奥様”にもお会いしたいわ』

『妻は体が弱いのですよ、ですからあまり連れ回したくないんです』
『まあまあそう言わず、秦部家で将来を有望視されているのは眞一しんいちさんと達哉たつやさん、そして有稔さんだけなんですから、ね。分かってちょうだい』

聡子がそのようなこと言うときは大体下心があるときだ。それは有稔が虐げられながら本邸に住んでいるときに学んだことで、したがって今回も例によって下心があつて、誕生パーティーを開くというのはただの口実にすぎないのだ。これまで一度たりとて有稔のために誕生パーティーを始め、何かしたことの無い聡子なのに今回に限っては 下心が読めてしまうというものだ。

有稔は呆れたように深く息を吐くと、落ち着いたら一度帰りますよ、とだけ言つて電話を切った。

電話の間、有紗は心配そうに有稔のそばを離れようとしなかった。帰社したときのままのワイシャツの裾をずっと握っていた。

「どうしてパーティーを渋るんですか？ それくらい私にもできます！」

「仮にも世間には公表していない妻の存在だ、だからむやみに連れ回したくないし、君を祖母に合わせるようなことはしたくない」

「大丈夫です。うまくやってみせます、だから……行かないなんて言わないで。そのための結婚だったはずです」

有紗は有紗でそういうときが来れば最高の妻を演じてみせる自信はあると自負していた。そして有稔が生まれた日なのだからたとえホスト側に下心があったとしても行くべきだと思っていた。有紗にしてみれば姉の真季に虐げられて日々を過ごして来た、そのことを思えば誰かに誕生日を祝ってもらえるということは喜ぶべきなのだと考えていた。

有紗のそのやる気がみなぎった表情を見て困ったように有稔は肩をすくめた。

「分かった。その代わり一瞬たりともそばを離れるな、分かるな？」

「はい、ちゃんとそばに控えています」

「今日はよく来てくれましたね、楽しみに待っていたんですよ」

聡子は相変わらず作り物の笑顔を貼り付けて有稔を『H a t a b e green hotel』に迎え入れた。その隣には高校生だとはれないようにメイクでしっかり大人っぽく顔を作り込み、胸元でリボンの切り替えがっているピンク色でサテン生地のアライン

ドレス、さらに同色の腕までのグローブと結び上げた髪に髪飾り、それらを身につけ有稔の隣に控えていた有紗。

太めハイヒールのパンプスという、いつもとは違い履き慣れないせいでバランスをとるのに苦心していた。ドレスを始め、一式は有稔が見立てた。

一方有稔は、タキシードに蝶ネクタイという装い。髪はしっかりとワックスで固められていた。有稔のいつもとは違う装いに有紗は目のやり場に困っていた。

有稔の祖母である聡子を初めて目にした有紗はグツと手を握りしめた。緊張して誰の目に見ても本当の夫婦を演じていられるか不安になった。有稔に有紗の緊張が伝わったのか、袖口を掴んでいた有紗の手を掴み自然に見えるように腕を組ませた。

「こうしている、変に緊張するな」

「……」

今日の主役である有稔が登場したことで周りは一気に有稔に視線を向けた。この誕生パーティーは立食パーティーであるが、それは有稔が聡子に出席する代わりに立食するよう条件を出したのだ。立食パーティーのような少しくだけたパーティーの方が有紗が緊張することもなく、いつも通り振る舞えるのではないかと考えてのことだった。そちらも聡子側は有稔に出席してもらわねば、と意気込んでいたためその条件を難なく呑んだのだ。

秦部家一族だけでなく、秦部グループが日本最大の財閥系企業であるため、一部経済界からの参加者や同業者の参加者の視線が一気に注がれた有稔はいつも通りクールを装っていたが、有紗はそれでも有稔の後ろに隠れるように腕を組みながら一歩後ずさった。

「有稔、よく来てくれた。今日はお前が主役なんだ、緊張することはない」

秦部家現当主で有稔の祖父である秦部良蔵はたへりよつぞう、はたへりよつぞう 齡80はまるで有紗が存在しないものとして振る舞い、有稔だけを連れて会場前方へ行ってしまった。その場に取り残された有紗は有稔が言った『そばを離れるな』という言葉を脳内で繰り返し返していた。そんなに簡単に約束が破られるとは思っていなかった有紗は立ち尽くしていた。その腕には先ほどまで有稔と腕を組んでいた感触が残っている。有稔が遠ざかっていく姿を目で追うことしかできなかった。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。早速ではありませんが秦部グループ最高経営責任者である我が孫、秦部有稔の婚約者を紹介します」

有稔がいつか結婚できないことを暗に伝えていたにもかかわらず、前回のパーティーと同じく、今回は有紗がいる目の前で婚約者を紹介しようというのだ。有紗は怒りや悲しみで気持ちの整理が出来なかった。

『やっぱり仮面夫婦なんだ。結婚も嘘で、いつかは捨てられるんだ』

目の前で繰り広げられる婚約者紹介の一部始終を横目で見ながら、有紗は会場の一番隅に移動し、ほぼ壁と一体になっていた。

たとえばそれが偽りの結婚でも有稔に興味を持ち始めていたところで、もっと知りたいという思いが芽生え始めていた有紗にとって見事に打ち砕かれたのだ。だったら初めから有紗の存在を公表して欲しかったし、隠さなければならぬような存在ならば有紗がいてもいなくても同じじゃないのかと有稔への疑念を抱き始めていた。

「婚約者は旧神戸財閥の総帥の孫娘、神戸純玲さんで」

喧騒からそつと抜け出した有紗は化粧室へ行つて顔を洗いたかった。そして現実逃避したかった。さつきまでの喧騒は嘘のように廊下は静寂を保っている。

化粧室へ行く途中で何度か躓^{つまず}いては転びそうになった。すべては有紗が見立てたこの履き慣れないパンプスのせいだ。

「……………」

「……………」

化粧室の入口付近でタキシードを着た背の高い男と、同じく背が高く赤いタイトなパーティードレスを身に纏い赤いルージュが人目を引く女は互いに腰に腕を回し逢瀬の最中だった。

有紗は思わず階段近くの柱の陰に隠れた。隠れた理由は特になかったが見てはいけないという心理が働いたからだ。

「あいつもバカよね、同伴で来たの見た？ 当主とおばあ様は端から『付録』は眼中になかったみたいだけど。アハハ」

「もちろん、すっかり見たよ。あれじゃ当主になれないだろう。いや違ったな、CEOになれても最初から当主になれないか、あいつは」

秦部のすべてを掌握できない雇われ社長状態だ、と男女はケラケラ笑いながら、話の内容を察するに誰かのことを言っているようだった。

『当主……………？ もしかしたら 』

味方ばかりでなく敵も必ず存在することをこのとき初めて知り悲しくなった有紗は小さいバッグをギュツと握った。

その後、会話が途切れると何度もチュツチュとキスする音が静か

な廊下に響いた。キスすら知らない有紗には衝撃だった。キスを目の当たりにするといかに自分が愛されていないかを突き付けられた。やはり偽装結婚と仮面夫婦はそれ以下はあっても以上にはなりえないのだ。

「あら？ あなたが有紗さん？」

会話に聞き耳を立てることに気を取られ、いきなり名前を呼ばれてびつくりした有紗はその場に固まってしまった。そこに『有稔の婚約者』が至近距離に迫って来た。『婚約者』の隣に有稔はいない。彼はまだ喧騒の中で誕生日を祝ってもらっているのだろう。

「なんのつもりで有稔さんと一緒になられたのか存じ上げませんが、有稔さんもお人が悪いです」

「あ、あの……あなたは」

「申し遅れました、私有稔さんの許婚の神戸純玲と申します」

『ああ、そういうことだったのか。毎日帰りが遅いと思っていたら』

有紗は最高の妻を演じるために自分に言い聞かせた。婚約者より妻の方が立場は上なのだと。

「秦部有稔の妻、有紗です。どうぞよろしくお願いしますね」

丁寧にペコツと頭を下げた有紗を見て、純玲は怒り心頭だった。純玲に盾突くことは神戸家や秦部家を敵に回すことだと教えられてきた純玲は、そこに胡座をかき、人を思うがままに動かしてきたのだ。それが自分の思うように物事を運べないとなると途端に当たり散らす。

「あら、そう。あなた一回りも年上の有稔さんを手に入れるのに何をなさったのかしら。ああ、今時のあなたくらい年代の人間は貞操観念が欠落しているのではたね、なんて身持ちの悪い。本当に“体の弱い”奥様ですこと」

純玲は有紗に見下すような視線を向けると、値踏みするように上から下までじろじろと見た。有紗は当然居心地が悪い。蛇に睨まれた蛙状態だ。

「私と有稔さんはそんな
」
「言い訳はよろしくつてよ」

後ずさる有紗に等間隔で距離を詰める純玲。純玲は有紗にはもう後ずさるスペースが残されていないことに気付いていた。それを分かった上で純玲は口角を上げ笑みを浮かべて最後の一步を踏み出した。

11th 奥様と婚約者（後書き）

純玲嬢と有紗の最悪な出会いですねこれは。そして純玲嬢怖いです。もう悪女ですね。だけど作者としてはそんな彼女が好きです。

純玲としては今まで自分が婚約者で許嫁だと言われて準備なりお稽古なりすべては秦部、神戸両家、また有稔のためにしてきたことをすべて有紗に持って行かれたことが相当悔しいわけです。

そんな純玲嬢がこれからどうなっていくのか、そんなところも見届けていただけたらと思います。

12th 募る後悔の念

有紗はすぐ後ろがメイン階段だと気付かず、15段下の踊り場まで転落した。バッグの中身のグロスルージュやハンカチ、コインケースに携帯電話、そして有紗が大切にしていた写真入りのパスケースなどを派手に階段にばらまいた。

純玲はすぐさま叫び声をあげて周りに知らせた。そして階段を駆け降り、踊り場でうずくまり意識のない有紗のそばまでやってきた。

「何事ですか!?!」

悲鳴を聞き駆け付けた人々の中には当主夫妻や次期当主候補の眞一や達哉、そして有稔もいた。有稔はよく覚えているピンク色のパーティードレスを見て、すぐに有紗だと分かり青ざめた。冷や汗が背中を伝う。

「有紗! 有紗っ! しっかりしろ!」

有稔は、有紗のそばに寄り涙を流している純玲をその場から退かす。他の誰よりも先に有紗に駆け寄り上体を抱き起こした。

有紗は全身を打ち付け、ドレスが所々擦れたり破れたりしてどれだけ階段に打ち付けられたか理解するには目視で十分だった。額だけでなく脚の間からも出血しており、有稔はタキシードの上着を脱ぐとその部分にかけた。

「早く救急車を!」

有紗はそのまま救急車で秦菱大学附属病院へ搬送された。救急車には有稔も付き添いで乗り込み、その晩は有紗のそばを一時も離れ

ることはなかった。もちろんパーティー自体は主役の有稔がいないことで必然的にお開きとなった。有紗は緊急処置され、二日間ICU、その後一般病棟へ移された。

有稔は仕事が終わる次第いつも有紗の病室を訪れ、意識が戻らない有紗の点滴を打たれた手を握り常に話しかけた。これも早く意識を取り戻すには必要な過程だという。

有紗の現在の状態について主治医から説明を受けた有稔は生気が抜けてしまった人形のようにだった。

有紗の主治医である秦部大和はたへやまとは長女夫婦の養子で、彼は三浪して医学部に入学、養親への愛情に報いるように必死で勉強し徐々に頭角を現したという、いわゆる苦勞人だ。大和は有稔の一年下だが養子ということで初めから次期当主候補争いに巻き込まれることなく、大学病院で医師として働いている。そして秦部家の数少ない有稔の理解者でもある。

「奥様である秦部有紗さんですが……転落したときの衝撃で全身を強打し、額を5針縫う怪我でした」

大和は言いにくそうに次の言葉まで間があった。有稔はよくないことなどだと覚悟を決めた。

「それともう一点、打ち所が悪かったのか局部からの出血がありました。最悪、将来お子さんを望めないかもしれません。まだお若いので回復は早いと思いますが……」

意識の戻ったときにこの辛い事実を有紗に伝えなければいけないのかと胸が締め付けられ、眉間にしわを寄せ顔をしかめた。有紗は子供は要らないと言っていたが、それは有稔が言わせたようなもので有稔は有紗の本心を知らない。

怪我をさせ、拳句の果てには子供まで望めない体にしてしまったのは、あの日自分がパーティーに同伴させたせい。いや、元はいえは結婚した事自体が悪いことであると。せめて厳しく言い聞かせてでも留守をさせておけばよかった、と後悔した。罪滅ぼしのように有稔は寝る間も惜しんで、社と病院を行き来する生活を一週間ほど続けたところ、ついに大河原や伊瀬から一度家^{うち}に帰って休んだ方がよい、と忠告されたのだ。

その間に有紗は一ヶ月は休学する旨を、医師の診断書と他の書類とともに高校に提出した有稔。ちょうど高校は夏休みが始まったばかりで授業に遅れる心配はなかったことが幸いだったが。

「やはり一度お休みになられた方が……」
「有紗をこんな目に遭わせたのは私のせいだ。連れていくんじゃないかった」

孤独な最高経営責任者は自分を責め続けた。有稔は今にも良からぬことを考え行動しかねないほど精神的に追い詰められていた。

大河原や伊瀬が病室で様子を見て、何かあつたらすぐに連絡するという条件で有稔は帰宅することに渋々応じたのだ。

有稔は一週間ぶりに帰宅。部屋はあの日、誕生パーティーに出たときのままの状態だった。有稔が見立てたパーティードレスの入った箱を嬉しそうに開ける姿、メイクスタッフによるヘアメイクアップであまりの変わりように驚く有紗が脳裏に焼き付いて離れない。自然と目から熱いものが込み上げた。

「有紗……」

どうして熱いものがこみ上げるのか、今の有稔には分からない。ただ有紗をそのへんの女性と同じように思っていないという事実はそろそろ自覚し始めていた。

ある日、春川菜月の元に一人の男が尋ねていた。黒いスーツを身に纏った大河原怜司だ。菜月と大河原は有紗の家出騒動の際に顔を合わせた程度だったが、今回はわけが違う。

なんと菜月の両親もいる中で話し始めたのだ。しかし話の内容はよくある交際や結婚といったことではない。

「私は秦部グループ人事部人事課長兼最高経営責任者室室長、大河原怜司と申します。ご両親をはじめ菜月さんは秦部グループはご存知ですね。4月に秦部が高校を訪問いたしました……」

「もちろん記憶に新しいです。よく存じ上げております。その秦部グループのCEO付きの方がどうして家へ？」

菜月は疑問でいっぱいだった。なぜ秦部グループのCEO側近が春川家に来るのか。それは菜月の両親も同じだった。

そもそも春川家を訪問したのは有稔の命令ではなく大河原の独断だ。

「まず、これをどうぞお受け取り下さい」

そう言ってテーブルに差し出したのはジュラルミンケースである。大河原がケースを開けると中には札束がびっしり並べられていた。それを見て当然一家は驚いたが、大河原は有無を言わせぬ態度で、目で、何も言わずにおとなしくしまっておけと訴えた。これから話す内容に対する口止め料であると同はずぐに理解するとケースを受け取った。

「前回訪問の際に何かしらお察しいただけたかと思いますが、上杉有紗の件です。あ、今は秦部有紗ですが」

「は、はたべ……ありさ？」

菜月は目を見開き状況を飲み込めていないようだった。有紗が有稔の配偶者となっていたことを知らなかった菜月は冷静になろうと努めていた。さずが口止め料として渡されるだけの価値のある内容である。

「ええ、一度誌面で騒がれたあの一件です。この4月に秦部と上杉は結婚いたしました」

「け、結婚!？」

菜月と両親は驚きのあまり開いた口を閉じることを忘れてしまったようだ。大河原の事実を淡々を伝える声に感情はこもっていない。とても義務的だ。

「高校へは今までどおり上杉姓で通っていますが。このことはまだごく一部の人間しか知らないことです。実は今回」

大河原は今までのこと、そして今有紗が置かれている状況を話した。しかしそれは一部で有紗が将来子供を望めないかもしれない件は話さなかった。大河原が菜月に話したのは、菜月が有紗のもつと

も信頼している友人の中でもとりわけ仲のよい間柄だったからだ。
その上で菜月をすぐに秦菱大学附属病院へ連れていき有紗の顔を見せることにしたのだ。

病室の入口のネームプレートには『秦部有紗様』と記されており、大河原の話が事実であることを確認した菜月。大河原と菜月が病室に入ると有紗の手を握っていた有稔が立ち上がった。

「君は？」

「有紗の友人の春川菜月です。大河原さんから聞きました。有紗の意識が戻らないって……」

そう言つて、菜月は道中で購入したフルーツの詰め合わせを窓際のテーブルに置いた。そしてベッドに寄り有紗の髪をなでた。

額を5針縫ったが、つい先ほど抜糸して今は脱脂綿とガーゼを不織布テープで止めているだけになった。それでも菜月には痛々しきうに見えた。

「もうすぐ5日になる」

「そう、ですか」

有稔は丸一日休暇したにもかかわらず、激務とストレスでやつれて見えた。相当疲労が溜まっているようだ。

それにもかかわらず、有稔はスツールから立ち上がると菜月をそのスツールに座らせた。

「何点かお尋ねしたいことがあります。4月にご結婚なさったんですよね。ということは高校訪問されたときにはすでにご結婚を？」

「ああ、そうだね。そのときにはすでに結婚していたよ」

有稔は窓の外を見、遠い目をして思い出し、優しい声で答えた。
それで菜月はそういうことだったのかと合点がいき、ふっと笑った。

「有紗、あの日すごく生返事が多かったんですよ。心ここにあらずというか。きつと嫉妬してたんだと思います。高校へは旧姓で通ってるし、公にはできない結婚だったんじゃないかと思います。家出のときは将来子供ほしいかどうかというようなことを聞かれました。そして帰りたくないって有紗が……」

有稔は初めて聞くことばかりで驚いていた。有紗はそういうことはまったく言わなかったので、有稔は知り得ないことだった。

やはり有紗は有稔に身持ちが悪いと言われたことやきちんと話を聞かなかったことが原因で家出してしまったのだ。

「そんなことを有紗が……」

有稔の容姿がいいことや、堂々と好きだとか結婚したいだとかを言える女子生徒にいい感情を持っていなかったことに有稔は嬉しい思いをした。

そこへ病室のスライドドアをノックして入って来たのは、主治医である秦部大和。大和は手招きして有稔を連れて病室を出ると同階のラウンジへ連れ出した。

「大和、なんだ」

「最近ババアが帰って来いとうるさいそうさ。養母ははがそう言っている。だから一度本邸に顔を出した方がいいんじゃないか？」

大和のいうババアとは聡子のことだ。聡子の底意地悪い性格に辟易しているのは有稔だけでなく大和も同じだった。大和は秦部家の

中でも比較的好きなことを好きなのでできる身の自由さがあることが幸いだっただ。その自由さ故、先日のパーティーには出席していなかった。

聡子が本邸に帰ってこいというのは今に始まったことではない、これまでにも度々あったことだ。しかしその度に理由をつけては帰らなかったが、今回はさすがに一度帰らなければいけないと思っていた。

「ああ、そうだな。今日にも帰る」

「今日はえらく素直だね、社長さん」

「うるさい、さっさと仕事に戻れ」

「はいはい。一度ババアをガツンといわせてくれよな」

大和はひらひらと手を振るとナースステーションへ向かった。

有稔は大和を見送ると、そこへ病棟全体に響くのではないかというくらい大声が後方から聞こえた。

「秦部さん！」

「社長！」

その声に驚いた有稔は後ろを振り返り、そのただならぬ空気を察し脈拍が速くなり心臓が脈を打った。

「どうした、二人とも」

「あ、有紗さんが……」

12th 募る後悔の念（後書き）

この終わり方どうなのって感じなのですが、乞うご期待！笑
そして大河原くんちょっと強引じゃないのっていう。

有稔が何事かと急いで病室へ戻ると、そこには実に5日ぶりに意識が戻った有紗がじつと有稔の方を見つめていた。有稔は戸を引くとそこで固まってしまい動くことができない、それくらい信じられないことだった。有紗の瞳には有稔がしっかり映っている、それは今の有稔を満足させるには十分だ。

そんな有稔を見て菜月は急いでナースコールで主治医を呼んだ。するとすぐさまナースステーションから秦部大和が走ってやって来た。この間一分の出来事だ。大和はなかなか中に入ろうとしない有稔の肩にポンと手を置くと有紗のいるベッドまで連れていった。

「お加減はいかがですか？」

「体がちよつと……痛い、です」

大和はカルテに目を通しながら有紗に問い、返答を聞くと頷きカルテにペンを走らせた。

5日ぶりに聞く有紗の声はか細く弱々しい。集中して聞かないと聞き逃しそうだ。

有紗は自分を困む人間を一人一人確認するように見回した。

「有稔……さん、菜月も……」

「有紗、心配したんだよお」

菜月は感情に任せて、リクライニングした有紗に軽く抱き着いた。有紗が、いつか話すから今は聞かないでほしいと菜月に言ったことがあった。菜月は大河原の話からその意味を察した。つまり有稔と結婚したことに悩み、高校生が結婚していることを菜月にすら言えなかったのだと。どうして二人が結婚することになったのか、そ

れは今の菜月には知り得ないことだったが。

菜月と有紗は少し話した後、大河原にそつと耳打ちされてまた来ると言つて、大河原とともに病室から帰つて行つた。それと同時に大和も有紗の意識が戻つたことで山は越え、次の治療方針の再確認のため病室を出ていった。残つたのは有稔と有紗だけで、有稔は有紗のささいな挙動を見逃すまいとじつと有紗を見つめていた。

「有稔さん……私、言われたこと守れないし、あなたには純玲さんつていう婚約者がいるじゃないですか。だからもう」

有紗の意識が戻り、有稔への開口一番は有稔が一番聞きたくなかった単語だった。自分の気持ちに気付いた有稔としてはこれほど傷つくことはないだろう。

「それ以上何も言つな。余計なことを考えるな」

有稔は歯ぎしりするように歯を食いしばり、耐えようとしていた。そして呼吸を整えると有紗のすぐ横まで行き、有紗の頬を右手で触れると同時に親指でカサカサした唇に触れて顔を近づけるとそつと口づけようとしたが、躊躇い有紗と距離を置くようにそばの椅子に座つた。

それはただ触れるだけの行為なのに、有稔にとっては勇気のあるもので、今すぐにできるものではなかった。今まで性行為はおろかキスすらまともにしなかったのだから今更、という思いがはたらいた。一度築き上げた偽装結婚と仮面夫婦の壁を自ら越えてしまうなどできるものかという自制した思いによって有稔の理性は辛うじて保たれていた。

「……君とはできない」

キスも寸止め、拳句有紗とキスできないと言われ、それ以上純玲の件にも触れようとしない有稔を見て有紗は邪推した。

「じゃあ、やっぱり……私はお払い箱で純玲さんと……？」

有紗は今にも涙をこぼしそうなほど目を見開き、うつすら涙を溜めていた。

有紗は心配になっていた。有稔に言われたとおり誕生パーティーではそばに控えていられなかったし、最高の妻を演じるはずだったのにみつともなく階段から転落、拳句入院。正直、今離婚するとすると有紗は生きていけなくなるだろうが、一時でも足を引っ張ってしまったのだから一緒にいる資格はないと思っていた。

そして、神戸純玲という婚約者がいながらそれを隠して有紗と結婚した理由を知りたかった。

「離婚はしない。純玲嬢とは結婚しないし、する気もない。妻は君一人で十分だ。なんのための結婚だと思っているんだ」

「ゆ、有稔さん……私……」

有稔のいつもの自信のある振る舞いからは一転、今は傷を負い弱り切った野獣のようだった。

その言葉から妻のポジションに有紗は必要だが、ただそれだけで有稔は有紗を解放する気がないのだということだ。

途端に有紗はふっと淋しげな様子を見せると、再び布団に身を沈めた。

「有稔さん、顔色よくないですよ。ちゃんと寝てください。仕事忙しいんですね」

それは有紗の精一杯の抵抗だった。有紗は意識が戻るまでの間、

有稔が時間の許す限りずっと付きつきりだったことを知らない。有紗の付き添いと仕事との両立で顔色がよくないと思うのではなく、激務ゆえに顔色が悪いのだと決め付けたのだ。

有稔は何も言わずにただじっとしていたが、意を決するように立ち上がった。そして有紗に一言声をかけた。

「今日はよく眠れよ」

深海の底を這うような低く心地のよい声は有紗の胸に染み渡った。その声は罪深いほどにザクザクと何度も胸を突き刺すのだ。有稔はまた来るとも来ないとも言わずにスライドドアを開け、閉まると同時に有紗の前から姿を消した。有紗は有稔が去ったあとのドアをじっと見つめてから、堪えていた涙がせきを切ったように溢れ出すと頬を伝った。

有稔の向かう先はひとつ。自分の決意とともに自然と早足になる。もう何年も見ることもなかったその建物は、悪魔に取り付かれたようにどす黒いオーラを放っていた。それは有稔が最後に見たときよりもさらに増していた。重厚な門扉を開けるとギーと錆びた金属同士が擦れあう音。

屋敷へと続く長く、ときどきくねっている玄関道。その道中の左手には今はもう使われていない煉瓦造りの井戸。右手には別邸へと続く細い小道、その先には本邸よりも幾分小さな煉瓦造りの別邸。そして有稔が今歩いているまさに正面には同じく煉瓦造り本邸。有稔は眉間にシワを寄せた。

できることならばもう二度と関わりたくはなかった。しかし、自身に流れる卑しい血がそうはさせなかった。いくら抵抗し、その血から逃れようとしても結局は連れ戻され、その血の中に沈んでいく。現に有稔は秦部グループの最高経営責任者の座にいるのだから逃れることはできなかったのだ。

有稔はここで暮らした数年を思い出すと、吐き気が込み上げ体が震える。何も知らないままロシアで暮らしていた方がどれだけ幸せだったか、何度も思った。そして何度も何度も母親を殺したいほどに恨んだ。

最高経営責任者たるもの、いついかなるときも常に気丈に振る舞わなければいけない。この思いだけが今の有稔を支えている。深呼吸し震える体を必死に抑えながら玄関扉を開けた。

「ただ今戻りました」

その一言で本邸にいる連中は一斉に有稔の方を向く。先ほどまでの談笑は嘘のように一瞬で静まり返るのだ。

ツカツカと中へ入り、広いホールのようなリビングにはメイドが数人と仏頂面の良蔵に妻の聡子、再従妹の純玲に長女夫婦の養子大和、次女夫婦とその長男眞一、次男達哉がいた。この場に大和がいたことが幸いだった。気を利かせて早めに帰宅したというところかおそらく今日にでも有稔が姿を見せると踏んで、近くに住む次女一家を呼び寄せたということだろう。有稔へ圧力をかけるように。

有稔は一瞥すると、沈黙を破るように話し始めた。

「おじい様、おばあ様、お久しぶりです」

「……そんなことはどうでもいい。要件を早く言え」

良蔵は早く話せとばかりに急かす。

有稔は来てやったのだから大人しく話を聞け、と内心毒づいた。

「私は4月に彼女……上杉有紗さんと結婚いたしました。離婚する気はありません。たとえあなた方になんと言われようと彼女を手放す気はありません。したがって神戸純玲さんとの結婚も当然考えていませんし、彼女が私の妻など……箱入り娘に務まるはずもないことで私の周辺をウロウロされることは非常に不愉快で目障りです」

今までの鬱憤を晴らしてやったのだ。これほどすがすがしいことは過去にあっただろうか。

そこへ当の純玲が悔しさを滲ませながら反撃してくる。それは純玲の性格を考えれば想定内の範囲だ。

「あらあら。そう本気で思ってます？　ねえおばあ様、私知っていますの。有稔さんの奥様が子供の出来ない体なんですって。看護師に少し掴ませたら話してくださいましたの」

秦部家で後継者が出来ないことなどあつてはならないことだ。子供が出来ないと分かれば有稔は次期当主候補から即刻外されるのは必至だ。

そうしたことから純玲としては有稔の弱みを握ったつもりらしい。

「おこがましいですが仮に私が当主になった場合に子供ができないとわかれば即刻眞一兄さんなり達哉君に当主の座を譲りますよ。まあ、純玲嬢と結婚することになったとして彼女との間に必ずしも子供ができるとは限らないわけですが……？　そういう意味では純玲嬢と結婚する意味はないでしょう。誰と結婚しても同じはずです」

そうして有稔は汚いものでも見るように純玲を上から下までジロジロを見る。純玲としては居心地が悪いことこの上ない。

「どうせなら秦部グループ最高経営責任者の任を解いてくれてもかまわない。そのときは有紗と二人でロシアに渡りますよ」

有稔を解任すれば会社が傾いてしまうことは秦部家の人間ならば誰でも分かっていることだった。仮に次女夫婦の長男眞一が最高経営責任者になる器があるかといえは全くない。大胆な戦略を実行するほど決断力に欠け、いつも自分の保身ばかり考えており指導力もない。

また次男達哉の場合はどうかといえば、トップに立つ者のカリスマ性に欠け、経営のなんたるかすら知らない。要するに二人とも無能なのだ。

しかし当主になれば、最高経営責任者に縛り付けておいた有稔を奴隷のように思い通りに動かすことができる、そんな思惑が見え隠れしていた。それは有稔がグループの長となったときから薄々感づいていたことだ。それを分かった上で任を解け、と言ったのだ。

有稔を解任することは今の秦部にはできないことは有稔を除く次期当主候補の二人を見ればよくわかることだ。

「すばらしい！ 有稔、お前はすごいよ」

振り向けば満面の笑みを浮かべた大和がパチパチと手を叩いていた。

13th 反逆行為（後書き）

有稔言っちゃいましたね。有紗を連れてロシアに渡るんですって！最後の最後に大和の登場でした笑 大和は医師という立場さえ奪われなければ秦部家の中では基本的に自由人間なので多少のことには動じません笑

14th 心強い味方

「純玲くん、今いいこと言ってくれたね。患者のプライバシーに関わることは守秘義務により固く守られるべきだ。その話、詳しく聞かせてもらおうか」

大和は先ほどまでとは打って変わり、無表情で冷たく軽蔑の眼差しを純玲に向けていた。大和は普段は温厚な人柄だが、人の道から外れたことをする人間には厳しく容赦はしないのだ。それは幼少期の経験からくるものだ。

それを見た純玲は目を泳がせ、落ち着きをなくしていた。

「なによ、孤児院からお情けで拾ってもらった血筋の分からない捨て子が！ 私は何も悪くない！ ただあの看護師が勝手に話しただけ！ それにあの事故だって勝手に……私は何も悪くないんだから！」

純玲は取り乱し、きれいに手入れした爪を噛み始めた。精神的に不安定になりストレスがかかっている証拠だと大和は有稔に耳打ちする。

そんな大和は純玲に暴言を吐かれたことなどまったく気にする様子はない。孤児院に入れられた時点で自分の血筋などあつてないようなものだった。そんなことでいちいち目くじらを立て無駄な労力は使ってられないと同時に開き直っている部分もある。それならば血筋のことを言わせないようにその人物以上の立場の人間になるまでだと言い聞かせてこれまで生きてきた。その結果が誰からも先生と呼ばれる『医師』という立場だ。

「患者の守秘義務のことは分かった。だがしかし“事故だって勝手に

に”がどうも解せない。君はあの場に居合わせたのか？ “勝手に”とはどういうことか説明してくれ。説明いかんによっては出るべき所へ出ることも検討しよう”

有稔は場合によつては裁判を起こすことも辞さない構えだ。純玲の滑らせた一言により“事故”の大部分が見えてきた。あの事故には純玲が一枚噛んでいたのだ。およそ純玲にとって邪魔者の有紗を消すことが理由だろう。容易に想像がつく。

ということとは、階段下でうずくまる有紗の横で泣いていたことも芝居を打っていたということだ。それが事実だとすればとても許されることではない。有稔の左手に力が入りぐつと握りしめた。

「まあまあ、有稔くん。落ち着きたまえ。ご乱心はよくないよ」

知らず知らずのうちに眉間にシワを寄せ険しい表情をした有稔に声をかけ肩に手を置いて諫めた人物は同じく次期当主候補の秦部真一だ。真一は有稔がこのような事態を引き起こしたことにより、大方勝負はついていると思つてゐるのだろう。次期当主は自分であると。

「真一兄さん、私はなにか間違つたことをしましたか。妻を守るのは夫として当然のことだと思ひますがね」

真一は有稔の意志の強い目を見ると何も言えなくなつてしまつた。そこへ見兼ねた聡子が真一に助け舟を出したのだ。

「有稔さん、あなたはご自分の立場がどのようなものか理解しているのですか？ 女にうつつを抜かして会社を傾かせ、長たる地位を失脚したなど孫末代までの恥です！ 秦部家一族の人間は表を歩けませんよ」

「お前の意思など関係ないのだ。おとなしく言うことを聞いて言われた通りに行動すればいいのだ。しかも結婚したという女は子供のできない石女らしいではないか。ちょうどいい、その女と離縁して純玲とやり直すのだ。よいな」

良蔵は薄ら笑いを浮かべそう吐き捨てる。メイドに支えられながら自室へ戻って行った。

有稔は有紗をそのような言われ方をして傷つき黙ってはいられない。そろそろ我慢の限界が見えていた。

良蔵も聡子も秦部家一族の間人は有稔の意思など毛頭聞く気はないようだ。有稔を都合のいい中身のない子供とでも思っているのだろう。

「だったら……私を最高経営責任者になど指名なさるべきではなかったのでは。いや、そもそも私がロシアにいたことを突き止め秦部家に連れ戻したのが間違っていたのでは。私はいつまでもあなた方に従う利口な子供ではないのですよ、大人です。有紗のことをそのような言い方をされては黙っていられない」

リミッターが外れ怒り心頭になりかけたのを察したのか、大和は有稔に両手を肩に強く置き険しい表情で落ち着かせる最善の言葉をかけた。

「止めておくんだ、今何を言っても理解してもらえないとは思えない。今は有紗さんの元へ行って個人情報漏洩の件を調べるべきだ」

「……」

有稔は有紗の名前が出た途端先程までの張り詰めた神経が一気に緩んだ。

「すまない大和」

「かまわない。いつものことだろう。さあ行こう」

有稔は大和に促されて帰る旨を伝えた後、真相を突き止めるべく本邸をあとにした。

有稔と大和は秦菱大学附属病院へ戻るとすぐに有紗のカルテに記されている看護師名に的を絞り、院外秘の情報に医局にある大和のパソコン端末からアクセスした。

スクロールして出てきたのは

「これは……」

「これだとつじつまが合う。そういうことだったのか。有紗に敵意を持っていたのはなにも姉だけではなかったということだ」

「ではこの看護師にこちらでしかるべき処分を」

「いや。ことを荒立てると有紗が不利になるかもしれない。仮にもこの看護師は有紗の“母親”だった人間だ。何が起きるとも限らない」

有稔にしては珍しい保守的な結論だった。いつもならばすぐにも追及したところだろう。

「それもそうだ。その看護師についてはこちらで出来る限り証拠を固めておくよ」

大和は有稔に同意すると証拠集めをすることを約束した。大和がなぜ有稔に力を貸すのかと言えば会社の長としても人間としても尊敬しているからだ。

二人の出会いは10年前に遡る。当時18歳の有稔は秦部家に連れて来られたばかりでろくに日本語も話せないにもかかわらず当時の理事の一言で 有稔を近くで監視するために身内の大学に入学させた 秦菱大学に入学、17歳の大和は秦菱大学附属高等学校3年で大学受験に向けて必死に勉強していたところに初めて出会った。本邸での食事の席で度々大和の名前が出ていたから有稔は名前だけは覚えていたときどき大和とも席を共にしていた。その頃は大和は養親と離れて本邸で暮らしており、養子という非常に脆く弱い立場だった。

『また汚らしい食べ方をして！ これだから捨て子は！』

『聡子、何度言っても無駄だ。理解する脳がないからな。コイツには』

『……』

好き放題言われている間、大和は何も言わず感情と生気を捨ててしまった蠟人形のようなだった。ひたすら下を向いて出された食事を口に運んでいた。聞かないふりをしておいた方が大和自身が傷つくことはないかと判断してのことかもしれない。

その食事の席で有稔は『君は、いつか、ボクの右腕になる』と言いつつ放った。当主夫妻はまたおかしなことを言っている、その程度にしか思っていないかった。

有稔はぎこちない日本語であったが大和に話したことで、さつきまで死んだような目をしていた大和が覚醒した瞬間だった。

『お前の右腕だと？ 日本語もまともに話せないお前の？ 馬鹿がついにとち狂ったか』

ハッ！ と大和は当然見下した態度だ。しかし有稔は怯むことはない。また馬鹿が戯言を言っている、そう思っていた。

この時点で誰ひとりとして有稔が今の秦部グループを背負って立つ人間になるとは思いもしなかった。有稔はそれから10年の間で目覚しい成長を遂げたのだ。

『そう。右腕。今に分かる、あと10年』

大和は日本語をろくに理解していないただの馬鹿だと思っていた有稔のしたたかさに驚かされたのだ。コイツについていけばこの苦痛な日々から解放されるかもしれない。有稔と大和の利害が一致した瞬間だった。

その夜。聡子は緑茶をすすりながら高ぶった気持ちを落ち着かせていた。

「奥様、お疲れではございませんか？」

聡子が良蔵と結婚してから仕える古町菊江こまちきくえは聡子の身を案じた。

「まさか……あの子にあそこまで言われるとは思いませんでした。

私たちの言うことだけ聞いていれば間違いはないのに」

「奥様……辛うございませぬ」

「あのことは誰にも、特にあの子には口が裂けても言いません。2

8年前に誓いました。墓場まで持っていくつもりです」

「もう28回目の会話でございますね」

「そうなりますね」

聡子はまた一口ゆっくりと緑茶に口をつけた。

「秦部グループの長に就かせたことは間違っていたのでしょうか…

…でもそうしなければ当時の秦部は大変危険でした」

「奥様、間違っではありませんよ。きっと奥様のお気持ちを分かってくたさるときが来ます」

そうだといいわね、とか細い声。そこにいるのはいつもの聡子ではない、目にうつすらと涙を浮かべた聡子だった。

15th 芽生え始めた気持ち

有稔と大和が情報漏洩の主犯を突き止めてからしばらく経ったころ、ようやく有紗が退院となった。ちょうど後期授業の開始に間に合った形となりこの日から高校に通い始めた。

しかしすべてがうまく解決したわけではなく、有稔との壁は残ったままだった。

有紗はいつもと同じように襟部分が濃緑で白地の夏服セーラーに濃緑チエック柄のプリーツスカート。いまどきの膝上ではなく、進学校らしく真面目に着るといった感じだ。髪はいつもは引つ詰めるのだが、この日は気分を新たにするつもりでハーフアップだった。

「上杉さん！」

校門に差し掛かったところで声を掛けてきたのは以前一緒に下校した上原知明。

「あ、上原くん。おはよう」

息を切らせながら有紗の元まで来るとニカッと笑ってみせた。

「おはよう。あれ、髪型変わった？」

上原知明はこの夏期休暇で海にでも行ったのだろうか、ほどよく日に焼けた肌になっていた。

「たまにはいいかなと思って」

「そのほうが似合ってるよ」

有紗の顔には思わず赤みが差した。上原知明にそのようなことを言われるとは思っていなかったから。有紗は話題を逸らすべく必死に話題を探していた。

「この夏休みは海に行ったの？ 日に焼けてるから」

「そうだよ。毎年夏休みの間は海外に滞在してサーフィンするんだ。あ、でも俺の一番はバスケだからね」

「毎年海外に？」

有紗が話に食いついたことが嬉しかったのか知明は話に熱が入る。

「毎年親父が商談で行くから一緒に行ってる。いずれ親父の後を継げなんて言われてるけど今はそんなつもりなくて」

有紗と知明は下足場で上履きに履きかえて三階の教室へ向かった。その間も話は尽きることはなく教室に着いてからも始業のチャイムが鳴るまで続いた。

ここ秦菱大学という場所には企業の社長や重役、資産家、はたまた政治家という高所得者層の令嬢や令息が通っているという、いわゆるセレブ大学である。その流れをくんだ附属高校ももちろんセレブ高校と呼ばれている。

有紗がこのセレブ高校に入れたのは父上杉豪の妻恵利子の家柄によるところが大きい。恵利子はまがりなりにも上杉家の末端構成員である有紗を『上杉家宗家』にものを言わせごり押し同然で秦菱大学附属高校に有紗を入学させた。入学に至るまでの経緯はそうであるとして一片の疑いもなく有紗は信じていた。

一方、春川菜月の場合は一般庶民であるが、彼女自身が非常に優秀であったために成績優秀による入学。特待生であり授業料免除、さらに定期試験で首席を維持することによる奨励金給付という待遇であることに文句は言えまい。この件に関して菜月は鼻にかけるこ

ともなく非常に謙虚であった。

「有紗、ご飯食べよ！」

昼休みになると有紗と菜月はいつも広大な中庭の時計をモチーフに花で彩られたそばのベンチで弁当を食べる。

「うん。いつものところこう」

有紗は入院中に菜月が見舞いに訪れたことによつて有紗が結婚したことや、その相手がこの秦菱大学の理事であり、秦部グループの最高経営責任者である秦部有稔であることを知られてしまったことについてどう思っているのか、平常を装っているが不安でたまらなかつた。

「菜月……あの、ね」

「なに？ どうしたの？ そんな難しい顔してさ」

有紗は箸を止め、話しておくべきだと口を開いた。

「うん……」

「有紗、結婚おめでとう。おめでとうことなんだからもっと笑つてよ。本人である有紗がそんなんじゃないよ」

菜月は有紗にそう言うと、ニカツと笑つた。有紗が真剣に言おうとしたことを先に言われてしまい拍子抜けしてしまった有紗はしばし固まつた。

「これいただき！」

菜月は箸が止まったままの有紗の弁当に入っている卵焼きをぱくつと頬張った。

「あ、あ。それ有紗さんがせっかく」

まだ全快でない有紗のためにしばらくは有紗が多忙の合間をぬって弁当作りをはじめ家事をしていることを、この一言により暴露したようなものだ。

有紗は言ってしまったと思ったのか、思わず手で口を塞いだ。

病院で初めて見た生活感のない家事などまるで知らないような印象を持った有紗が　しかも大企業のトップである　が家庭では妻の弁当作りをすると知ってか、菜月は思わず声を殺し肩を震わせながら笑った。菜月に見れば非常に興味深い二人であるらしい。

「旦那さんの愛情たっぷり卵焼き食べちゃった！」

舌を出して笑う菜月につられて有紗も思わず笑ってしまうのだ。

「もう！　菜月今笑ったでしょ。何かおかしいこと言った？」

「なんでもないよ。有紗はそうやって笑ってないとだめだよ。有紗？」

「うん？」

「ううん。やっぱり何でもなし。もうお昼休み終わりだよ、そろそろ教室戻ろう」

有紗と菜月がベンチから去ったあとにはこのやりとりを聞いていた人物が一人。昨日帰国したばかりのその人物は芝生の敷き詰めたある小高くなつた部分で昼寝をしていた。

「ふーん結婚ねえ……興味深い」

『きつと彼は有紗のことを一途に想っているよ』

この言葉を菜月は言いかけて胸にしまうことを選んだ。いずれ有紗はそのことに気付くだろうという期待を込めて。

「上杉さん一緒に帰ろう」

「上原くん。いいよ」

菜月は都合が悪いというので先に帰ってしまったところだったの
で今日は一人で帰ろうと思っていたところへのお誘いだ。
タイミングのよさに有紗は嬉しくなった。

「これから時間ある？ ちょっと寄りたい所があるんだ」

今日の知明は前回の反省を踏まえ、車道側を歩いている。知明は
有紗の反応をうかがっていた。

「どこ行きたいの？」

「部活で使ってる靴が破れちゃって。一緒に色を選んでほしいんだ」
「靴って大事なものでしょ？ たとえ色であってもわたしが選んで
いいの？」

たとえ色とはいえ、そんな大事なものを有紗の意見を取り入れる
とは。有紗は恐縮してしまった。

「かまわないよ。俺、色のセンス悪いから選んでほしい」

そこまで言われては頼みを無下にすることも出来まい。

「上原くんに似合う色選ぶね」

有紗は恐縮してしまっただままだったが頷いた。

「ありがとう」

有紗が知明と別れて帰宅したのは18時を回っていたが、いつも通り有紗はまだ帰宅していない。帰ってきてても22時や23時などざらだ。いつもどうしてそんなに遅いのか疑問に思うこともあったが、それは会社の長である限り仕方のないことなのだと聞いて聞かせた。そのような立場である有紗に対し、帰りが遅いなどと責めたりしてはいけないのだ。

有紗はリビングのソファに身を預け色々なことを考えていた。結婚してしばらく経つが有紗は手を出してこない。菜月にさりげなくそれを匂わせ尋ねたが、菜月は大層驚いていた。寝食を共にしているのにそれはどうなのと菜月は心配した。普通は夫婦二人でいれば夫婦の営みなど普通のことらしい。有紗と有紗にとってとはまったく普通のことではないが。むしろ異常とも言える。

営みと言っても有紗にはいまいちピンと来なかった。聞きかじりの知識程度で何をどうするのか具体的なことを分かっておらずぼん

やりとしか理解していなかった。

偽装結婚であることは有紗も十分承知している。偽装結婚の発端は有紗が路頭に迷おうとしていたところへ有稔が取引同然に結婚話を持ち掛けてきたのであるが、本当にそれだけの理由で結婚したのか、有稔が何を考えているのか有紗には分からないことが多かった。有稔は本当に有紗に興味がないのか、どこかで誰かに会っているのか……。真相は有紗には分からないが、他の女性 特に有稔の婚約者だと言われた神戸純玲 と会ったり過ごしたりしているかもしれない。その考えに至った有紗は『有稔の婚約者披露パーティー』で顔を合わせた高飛車な純玲の顔を思い出して悲しくなったし有稔を取られたくないと思ったのだ。有稔を取られたくないと思っただのは高校への電撃訪問以来これで二度目。自然と涙が込み上げる。

「なんで涙が出るのよ……」

この感情をなんと呼ぶのか有紗には分からなかったが、仮に分かったとしても認めたくない感情であった。

15th 芽生え始めた気持ち（後書き）

有紗の中に芽生え始めた気持ちとはなんなのか。色恋沙汰には疎い有紗なので遠回りです。

16th 早く大人になりたい

「え……どうして」

その日、有紗の右手にはしっかりと紙が握られていた。有紗は呆然とし、しばらく客人の去ったあとのドアを焦点の合わない目で見つめていた。

有紗はよろよろとかろうじて歩を進め、肌寒いバルコニーへと出ていった。

客人は有紗の顔を見るなり下等生物を見るがごとく眉間にしわを寄せ見下すと紙を差し出したのだ。その紙がどういう意味を持つものかいくら有紗でも分かる。

『あなた自身、子供ができない体であることをご存知？ 有穂さんがお気の毒。本当は有穂さんだって離縁したいと思つてらっしゃると思いますよ。あなたをそばに置いておくメリットなんてないに等しいのではございません？』

有紗はこのとき初めて自分が子供のできない体であることを知った。心当たりはあの有穂のバスデーパーティーの一件以外にはありえない。あのとき不注意で階段から転落したばかりに有穂の人生を狂わせてしまった。有穂は有紗に対して子供はいらないと言わせたが、今になって少し考えれば次期当主になるために盤石な基礎として子供は大事な切り札であることは誰にでも分かること。

途端に有紗は震え始め、一人では立っていられなくなって壁に体を預けた。

『ふふ。分かっていたただけならそれでいいんです。仮にも有穂さんの妻であるあなたを手荒には扱いたくはないですから』

有稔が帰ってきたときにはやはり23時を回っていた。

「有紗、いないのか？」

リビングの明かりは点いておらず真っ暗だったが、代わりに月明かりが差し込み青白く照らされていた。有稔はリビングに明かりを点すと有紗はおらず、代わりにバルコニーのスライドドアが開いており夜風がカーテンを揺らしていた。

有稔はバルコニーへ出てみると隅で膝を抱え顔を埋めている有紗に気付いた。

よく見ると肩を震わせている。おそらく泣いているのだろう。有稔は有紗のそばに寄り何と言葉をかけていいのか躊躇いながらも声をかけた。

「……有紗。大和に体を冷やすなと言われただろ」

やっと出た言葉がそれである。どれほど不器用なのかと自分で笑ってしまいそうになる。そう言うと、着ていたジャケットを脱いで有紗の肩にかけた。

「何を泣いているんだ」

有紗がどうして泣いているのか分からない有稔は有紗に対してどう接すればいいのか分からず戸惑った。

「……有稔さんはどうして私と結婚したんですか」

有紗の目は真剣だった。

「なにを今更言っているんだ」

「どうして……どうして言ってくれなかったんですか。私に子供ができないこと。私だけ知らなかったなんて」

有紗は泣きながら有稔に訴えた。一時でも有稔との幸せな家庭を想像した自分が馬鹿だった。有稔がつくったお弁当で菜月に羨ましがられて浮かれた自分が馬鹿だった。

未成年の有紗が有稔にできることはたとえ想い合っていない夫婦であつても有稔の子を身ごもり産むことくらいだ。それができないとなれば有稔のそばにいる意味などない。それにやっと気付くのに長い時間がかかった。

「有紗、そのことは誰に聞いたんだ」

まさか自分で大和に詰め寄り問いただしたなどということはあるまい。有稔は愚問であると頭を振った。いつか有紗に話さないといけない時が来ると前々から覚悟はしていたが、今まさにそのときが来たと覚悟を決める有稔は有紗の手を引いてリビングのソファに座らせた。

「今から話すことはとても大事なことだ」

有稔は涙をためた有紗の目尻を指で拭うと話し始めた。

「まず有紗の体のことだが、主治医の大和は決して子供が望めない

とは断言していない。君はまだ16だ。回復次第ではということだ。そして有紗が今持っている紙のこと。少なくとも君を追い出したいほどに疎ましく思っていないので安心しろ。本当に君のことを疎ましく思っているならば例の香水の件で荷物もろとも君を追い出している。分かっただらそんなものは捨ててしまえ」

有稔は紙もとい離婚届を破って握り潰すとゴミ箱に捨て有紗の方に向き直った。

「さあ言いたいことはそれだけか」

有紗は少しコクンと頷くと、有稔は口元にフツと一瞬笑みを浮かべ有紗を抱き寄せた。

「まだ不満そうだな。これ以上どうしてほしいのか言ってみろ」
「私と有稔さんは仮にも夫婦であって……その……だから……」

途端に顔を真赤にして俯く有紗は顔を見られないように有稔の胸に顔を押し付けワイシャツをギュツと握った。

そんな様子は有稔の加虐心をくすぐった。

「そんなに恥ずかしいことなのか」

有紗は気付く。有稔は自分をからかって遊んでいると。

「か、からかわないで」

そんな有紗を無視して有稔は有紗のあごに指を添えて目線を同じ高さにする。

「可愛いな、君は」

有稔の声が優しくなったかと思うと、端正な顔が近づき次の瞬間有紗の唇に何かが触れた。

「んっ……」

それがキスだと分かるまでしばらくの時間を要した。このような体験は初めての有紗にとってどうすればいいのか分からずしばらく硬直していた。触れるだけのキスがようやく離れると有稔が一言。

「お子様の君にはここまでだ」

有紗は何度も自分の唇を指で触った。まだ有稔の唇の感触が残っている。そんな余韻に浸っていたが、お子様と言われたことは気に食わない。

「私、お子様じゃない。結婚したら大人と同じ扱いだもの。だから子供じゃないです」

「有紗がそう思っているとしても、私にしてみれば12も年下の君は十分子供だ」

有稔は有紗の知らない12年分たくさん的人生経験をしている。酸いも甘いも噛み分ける大人だ。その点で子供と言われても仕方がない。子供である自分にはここまでということは大人であればもっと先があるということか。そしてその先を有稔は間違いなく知っており経験している。自分だけ知らないのは不公平だと思った有紗は唇を噛みしめた。

「……悔しい」

「だったら早く大人になることだ。さあ、いい子はもう寝る時間だ」
時計を見るとちょうど夜中の12時を指していた。有稔は有紗のひざの裏に腕を入れて抱きあげた。有紗はそのことに驚きおとなしくはしていられず暴れた。

「や、やだ、下ろしてください！」

「少しはおとなしくしないか。お子様はこうされていればいいんだ」
「またお子様って言った」

「では若奥様か？」

「……もう知らない」

有紗は若奥様と言われ悪い気はしなかった。一人で寝るからいいと言ったにもかかわらず、有稔に寝かしつけられながら思い出す。今までは一人で眠っていた日々を思い出すと涙が溢れ出しそうになる。有稔に悟られないように必死にこらえた。半年以上の離婚寸前の家庭内別居に近い生活は有紗には大層堪えた。だが、今は有稔が隣にいる。それだけで安心できる。

有紗が寝たのを確認すると有稔はネクタイを緩めながらほのかに明るいうりびングへ移動した。そして携帯電話を開くと数少ない味方である大和からの留守電を再生した。

「はは、やはりそういうことだったのか」

有稔は夜中にもかかわらず大和にリダイヤルした。

「大和か。私だ」

『こんな時間にどうしたの、社長さん』

大和はアルコールが入っているのかやけにハイテンションになっ

ている。社長さんと言われることは本来好きではない有稔は眉間にしわを寄せたが、アルコールの入っている大和に言っても仕方ないと思ひ黙っておくことにした。

「今、留守電聞いた」

「それなら話が早いね。これからどうするの」

「仮にも母親だった上杉恵利子に名誉毀損で訴え慰謝料の請求をするか……そんなことをしてもきつと有紗は喜ばない、むしろ悲しむだろうことは目に見える。次はないと釘を刺し、今回は有紗に免じて不問に付してやる。それよりも重大な問題がまだあるからな。そればかりに時間を取られるわけにいかない」

「分かったよ。その看護師の件は院長からの処分ということで厳正に処分しておくから、そっちはそっちで頑張れよ。医者がいい加減なことは言うことはご法度だけど、有紗さんの体の件はきつと大丈夫だ」

それは有稔が次期当主として盤石な基礎を築けるということだった。

有稔が本邸を訪れ現当主良蔵の顔を見たのを最後に、彼は以前より患っていた病が悪化し床に臥せっていた。主治医によると余命幾ばくもないということだった。秦部一族は早く次期当主を決めるべく眞一を担ぎ上げる者、達哉を担ぎ上げる者は奔走していた。一方で有稔を担ぎ上げる者はほとんどいなかった。この両者の違いはただひとつ。一族の認めた人間の血を引いているかどうかこの一点のみである。有稔が今までグループのために身を粉にして力を尽くしてきたことは加味されず評価に値しないということ。この重要な一点を守れなかった有稔の母親は良蔵、聡子の逆鱗に触れたために実質絶縁状態となった。絶縁状態となったにもかかわらず、有稔が呼び戻された理由は。

今の有稔には当主になるための野心などないにも等しかった。そ

んな有稔はある覚悟を持って“最後の仕事”に取り掛かろうとしていた。

16th 早く大人になりたい（後書き）

しばらくぶりの更新です。15話以降なかなか創作意欲がわかって少し離れていました。

今回16話にて有紗と有稔キッスしちゃいました（*ノノ）

なんだかお子様のためのキスのイメージで初々しい感じを出したつもりなのですが……。

初々しい感じ出ていましたでしょうか。有稔自身は初々しい感じ出てなくていいんです笑 有紗より人生経験豊富ですからそのような経験も当然あると思いますので。

次回もお楽しみいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5826s/>

偽装結婚、仮面夫婦

2011年9月5日17時15分発行